第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

1　調査に至る経緯

平成 9（1997）年、佐渡島に残る金銀山の価値を世界に発信し、その保護と活用を目的として佐渡郡町村会により「佐渡金銀山遺跡調査検討準備会」（以下準備会、平成 16 年 3 月佐渡市合併まで）が発足した。準備会は分野ごとに調査部会が設けられ、旧市町村と協力して各種の調査を進めてきた。準備会及び関連市町村のこれまでの調査成果については、佐渡金山遺跡（佐渡奉行所跡）調査報告書［佐藤・斎藤・滝川 2001］、味方家資料目録［佐渡金銀山遺跡調査検討準備会 2001］、西三川砂金山の鉄砲場遺跡・砂金江道遺跡発掘調査報告書［堅木ほか 2004］などにまとめられている。

平成 16 年 3 月、佐渡島内 10 市町村が合併して佐渡市が誕生し、準備会・旧相川町佐渡金銀山課・相川町教育委員会の調査を引き継ぐ形で、佐渡市教育委員会生涯学習課に佐渡金銀山室が設置された。平成 18 年度には組織改編により文化行政を主な業務とする文化振興課が生涯学習課から独立し、平成 19 年度には課名を世界遺産・文化振興課に変更、同年度には佐渡金山遺跡（上相川地区）調査報告書［宇佐美ほか 2008］・鶴子銀山跡分布調査報告書［宇佐美 2008］・旧佐渡鉱山近代化遺産建造物群調査報告書［佐渡市教育委員会 2008］が、翌 20 年度には吹上海岸石切場跡調査報告書［宇佐美 2009］が刊行された。

その後、平成 21 年度に世界遺産登録推進業務を特化させた世界遺産推進課が市長部局に新設され、それ以外の文化行政は教育委員会部局の文化振興室が担当することとなり、同年度には鶴子銀山跡分布調査報告書［宇佐美 2010］と佐渡金山遺跡（北沢地区）調査報告書［宇佐美ほか 2010］が、翌 22 年度には片辺・鹿野浦海岸石切場跡分布調査報告書［宇佐美 2011］が刊行されている。平成 23 年度には、再び文化財室が世界遺産推進課に合併され、世界遺産の登録推進を含む文化財行政全般を取り扱う部署となり、西三川砂金山遺跡分布調査報告書［若林・尾崎 2012］が刊行された。

佐渡金山遺跡の上寺町地区は、江戸時代初期に発見された相川金銀山の鉱山関係者の信仰対象である寺院群が所在した重要な遺跡であるが、これまで寺院跡や石造物等に関する部分的な調査が行われたのみであり［相川町史編纂委員会 1973、斎藤ほか 2003、佐藤ほか 2005］、その全容は明らかにされてこなかった。

このため、佐渡市では、平成 24 年度に上寺町地区の国史跡指定に向けての範囲・内容確認のための分布調査を実施することとした。

2　調 査 経 過

これまでの調査により、主な寺院跡のおおよその場所は明らかにされていることから［斎藤ほか 2003］、今回の調査では、遺跡の範囲や規模の確認を主目的とした。また、調査にあたっては、事前に地形図や絵図等から寺院の所在地を推測し、現地にて必要最小限の雑木の伐採を行い、斜面を造成した平坦面や墓地・石垣・石段など、地表面で確認できる遺構の分布状況をもとに、各寺院の位置関係や寺域の特定を行った。

以下、その経過を述べる。

平成 24 年度

8 月下旬から、比較的作業に入りやすい現道に面した万照寺付近の除草作業を開始した。調査区の現況は、手入れの行き届いていない雑木林が主体で、倒木竹が多く、作業は難航を極めたが、寺院に関連する石垣・石段・井戸などの遺構や、墓石等の石造物が確認されたテラスを中心に刈り払い作業を行い、11 月下旬には寺院のおおよその分布範囲を確定し、このうち 6 ヵ寺の寺域の確認を行った。12 月下旬に降雪のため調査を終了した。このほか、調査区周辺の 500 分の 1 地形図を作製した。

平成 25 年度

4 月に文化庁文化財部記念物課調査官による現地視察が行われ、国史跡指定に向けた今後の調査方針や事務手続き等の現地指導を受けた。その後、5 ～ 10 月にかけて調査区内の除草作業を実施し、遺構の現況確認及び遺物の表採作業を行った。調査の結果、江戸中期の絵図にみえる 8 ヵ寺のうち 1 ヵ寺については、以前の水害による崩落被害により、遺構の現況確認を行うことはできなかったものの、残る 7 ヵ寺の寺域及び各寺院の位置関係を把握することができた。10 月下旬には、遺跡の現地説明会を実施し、11 ～ 1 月にかけて 2 ヶ年分の分布調査結果をまとめた報告書作成作業を行った。

3 体　　制

平成 24 年度

調査主体	佐渡市（市長　髙野　宏一郎［4 月 17 日まで］、甲斐　元也［4 月 18 日～］）
総　括 庶　務 担　当 調査指導	高橋　則夫（世界遺産推進課長） 濱野　　浩（課長補佐） 下谷　　徹（調査係長） 若林　篤男（調査係主任） 尾崎　高宏（新潟県教育庁文化行政課世界遺産登録推進室主任調査員）
作業員	田中　元就　　大林　茂　　末武　年幸　　山本　修一　　渡邊　道春　　金津　秀夫 山本　裕幸

平成 25 年度

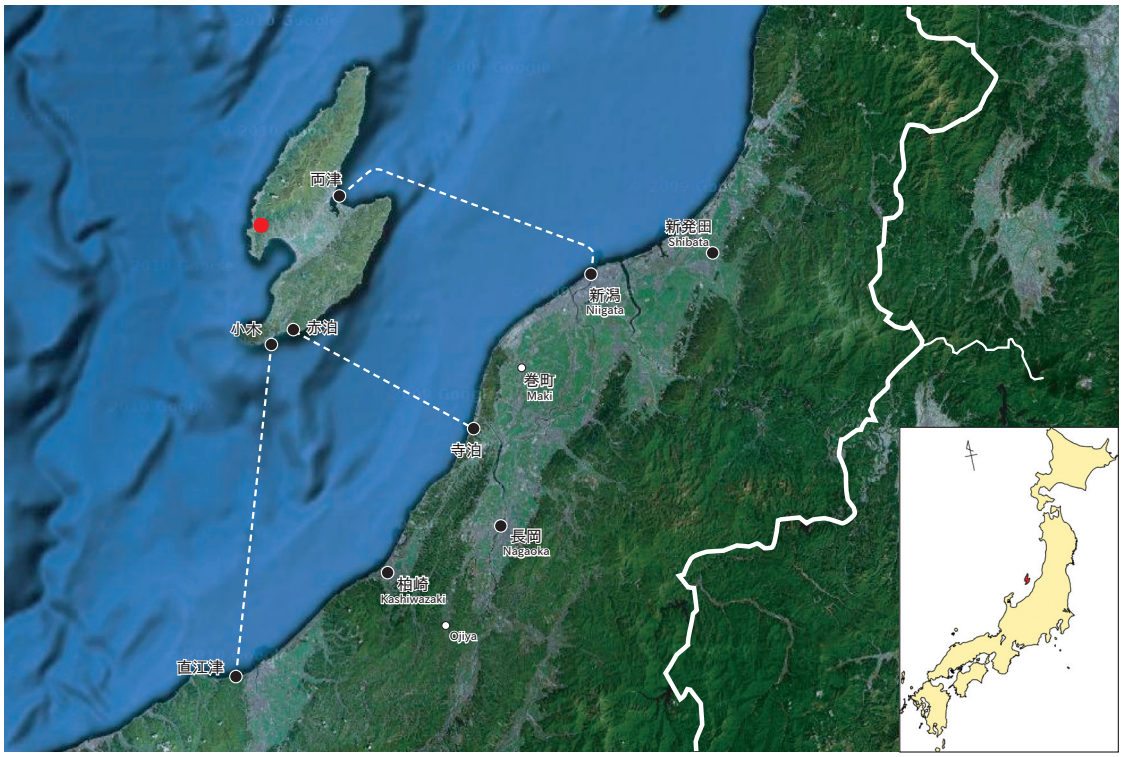
調査主体	佐渡市（市長　甲斐　元也）
総　括 庶　務 担　当 調査指導	石山　　勉（世界遺産推進課長） 下谷　　徹（課長補佐） 川村　　尚（調査係長） 若林　篤男（調査係主任） 相羽　重徳（調査係学芸員） 渡邊　裕之（新潟県教育庁文化行政課世界遺産登録推進室専門調査員） 尾崎　高宏（新潟県教育庁文化行政課世界遺産登録推進室主任調査員）
作業員	田中　元就　　大林　茂　　末武　年幸　　岩倉　幸男　　榎本　竹美

第Ⅱ章　遺跡をとりまく環境

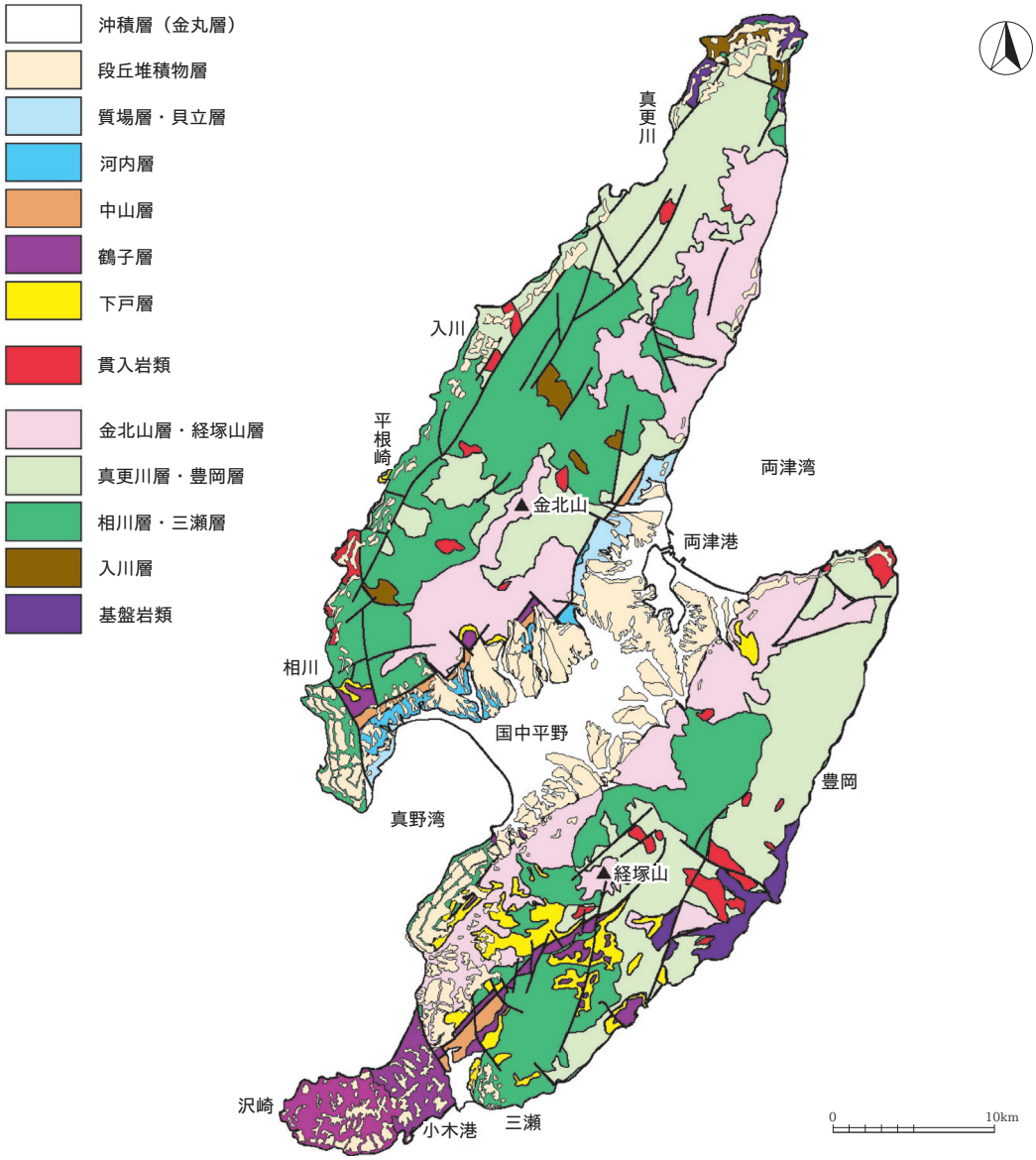
1　地理的環境

佐渡島は、本州・北海道・九州・四国を除くと、沖縄本島に次ぐ大きさの島で、新潟港（新潟市）の西方約 67km、直江津港（上越市）の北方約 78km、寺泊港（長岡市）の北西方約 46km の日本海上に位置している。面積は約 855.27km^2、周囲の海岸線は 280.4km を測り、山林と雑種地が島面積の 80％以上を占めている。島中央には国中（くになか）平野が広がり、北に大佐渡山脈、南に小佐渡山地が並行する形でそれぞれ長軸を NE - SW 方向に延ばしている。大佐渡山脈は、標高 1,172m の金北山をはじめとする 1,000m 近い山並みが連続し、小佐渡山地は、標高 645m の大地山をはじめとする比較的低い山並みが連続する。本州とは、新潟～両津航路、直江津～小木航路、寺泊～赤泊航路で結ばれているほか、平成 23 年 9 月からは、新潟～佐渡空路が就航している。

佐渡島で確認される最古の岩石は、今からおよそ 2 ～ 3 億年前の古生代後期のものであるが、佐渡島における地層の大部分は、火山によって形成された火山岩類及び日本海の海底で堆積した地層が重なって形成されたものである。このうち、相川金銀山が立地する大佐渡山脈を構成する地質は、古第三紀・斬新世（2,300 万年前）から新第三紀中新世初期（1,800 万年前）に堆積したグリーンタフである。また、その他の岩石として、凝灰岩、玄武岩、硬質頁岩がみられる。グリーンタフは、デイサイト（石英安山岩）や安山岩の溶岩類やそれらの火砕岩からなる火山噴出物を主体とし、下位から入川層・相川層・真更川層・金北山層の順に堆積しているが、これらをまとめて相川層群と呼んでいる（第 2-1-2 図・第 2-1-1 表）。



第 2-1-1 図　佐渡市の位置及び調査範囲（地図出典：Google Map）



第 2-1-2 図　佐渡市の地質概略図（[佐渡市世界遺産推進課 2011] 第 4-2-1 図を転載）

日本海が誕生した約 1,700 万年前には、海浸期に伴う砂岩・礫岩・シルトを主体とする堆積岩からなる下戸層・鶴子層・中山層が形成され、これらの地層が隆起運動により変形しながら海上に現れ、佐渡島が誕生したと考えられる。佐渡島が現在とほぼ同じ形状となったのは、今からおよそ数十万年前とされ、第四紀中頃になると隆起運動が活発化して、高い山地が形成され、氷期・間氷期の繰り返しによる海水面の上下運動が重なり、海岸段丘が形成されていった。こうした段丘面は、現在 5 段まで確認されている。国中平野は中央部が沖積層であるが、周辺部には低位段丘、中位段丘がよく発達し、加茂湖はこの中位段丘によって囲まれている。また、平野西側には真野湾に沿って八幡砂丘が発達しており、こうした砂丘列が 8 列確認されている［田海ほか 2000］。

相川の金銀鉱床については、「佐渡西三川の砂金山由来の農山村景観」保存調査成果から引用する［佐渡市世界遺産推進課 2011］。

地質年代		大佐渡山脈地域		国中平野地域		小佐渡山脈地域	
		層序	岩相	層序	岩相	岩相	層序
第四紀	完新世			金丸層	礫、砂		
	更新世 後期			住吉野層	礫、砂		
		中位段丘堆積物層		吾潟層	シルト、礫、砂		中位段丘堆積物層
				潟端層	砂、礫、軽石		
	更新世 中期	高位段丘堆積物層		赤坂層	赤色土、くされ礫		高位段丘堆積物層
	更新世 前期	質場層	シルト、砂、礫、化石	質場層	シルト、砂、礫、化石		
		貝立層	砂、礫、化石	貝立層	砂、礫、化石		
		河内層	砂質シルト岩、化石	河内層	砂質シルト岩、化石		
新第三紀	鮮新世	中山層	珪藻質塊状泥岩	中山層	平野の地下に分布する。	珪藻質塊状泥岩	山田川層（中山層）
	中新世 後期		珪藻土			珪藻土	野田山層（中山層）
	中新世 中期	鶴子層	層理の発達した砂質頁岩、シルト質泥岩、化石	鶴子層		層理の発達した砂質頁岩、シルト質泥岩、化石	鶴子層
		下戸層	礫岩、砂岩、シルト岩、砂礫質石灰岩、化石	下戸層		礫岩、砂岩、シルト岩、砂礫質石灰岩、化石	下戸層
	中新世 前期	金北山層	デイサイト質溶岩、凝灰角礫岩、凝灰岩、安山岩溶岩、真珠岩溶岩		平野の地下に分布する。	デイサイト質溶岩、凝灰角礫岩、溶結凝灰岩、凝灰岩、安山岩溶岩、頁岩	経塚山層
		真更川層	デイサイト質凝灰角礫岩、溶結凝灰岩、赤色安山岩溶岩、火山角礫岩、玄武岩溶岩、凝灰角礫岩、珪藻土、化石			流紋岩溶岩、デイサイト質凝灰角礫岩、溶結凝灰岩、凝灰岩、安山岩溶岩、凝灰角礫岩、頁岩	豊岡層
		相川層	ガラス質輝石安山岩溶岩、雑色安山岩質集塊岩、変質安山岩質溶岩、火山角礫岩、溶結凝灰岩、凝灰岩、含花崗岩礫岩、砂岩、頁岩			角閃石安山岩溶岩、安山岩質凝灰角礫岩、凝灰岩、ガラス質安山岩溶岩、粗面岩質安山岩溶岩、玄武岩質安山岩溶岩、集塊岩、凝灰角礫岩、溶結凝灰岩	三瀬層
						変質安山岩質溶岩、凝灰角礫岩、凝灰岩、溶結凝灰岩	相川層
古第三紀	漸新世	入川層	変質デイサイト質凝灰角礫岩、溶結凝灰岩				
白亜紀～石炭紀		先第三系基盤岩	花崗岩、花崗閃緑岩、変玄武岩、はんれい岩、蛇紋岩、粘板岩、頁岩、砂岩、チャート、石灰岩			花崗岩、ホルンフェルス、粘板岩、砂岩、チャート	先第三系基盤岩

地層境界の 実線は不整合関係を示す

第 2-1-1 表　佐渡地質層序（[佐渡市世界遺産推進課 2011] 第 4-2-3 表を転載）

佐渡における相川・鶴子鉱山をはじめ金銀鉱脈鉱床のほとんどは漸新世の入川層、中新世前期の相川層中に胚胎している［坂井・大場 1970、島津 1977b、佐藤憲隆 1987］。金銀鉱山の多くは大佐渡地域に分布するし、小佐渡地域にも新穂鉱山、田切須鉱山などが存在する。大佐渡地域には第 2-1-3 図のように多くの鉱山が分布し、そのうち規模の大きいのは相川・鶴子・高千鉱山である。

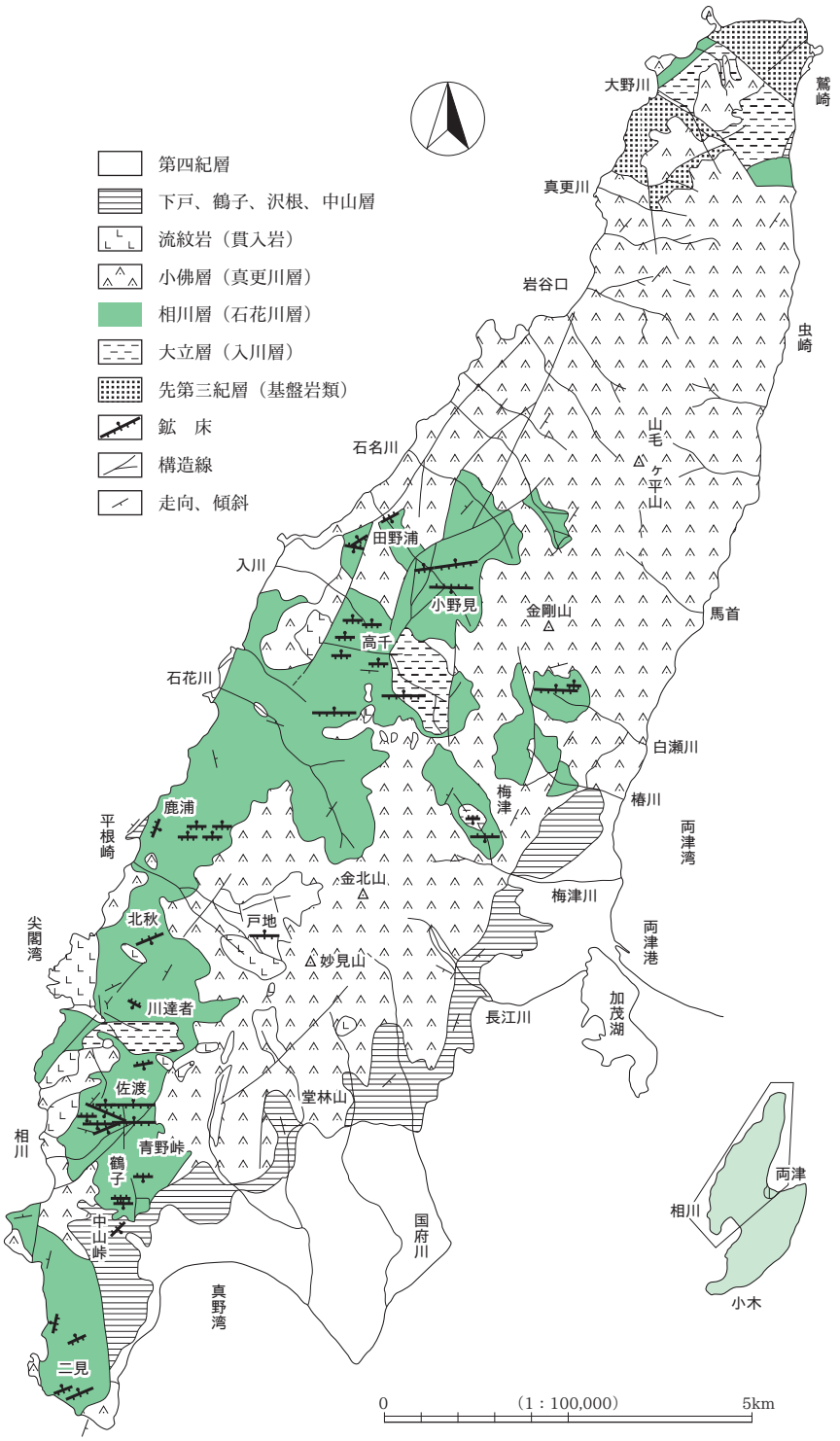
相川金銀山には東西方向の割れ目を充填した鉱脈とそれに斜めに交わる北西－南東、北北西－南南東方向の割れ目を充填した鉱脈が発達している。鉱脈が良く発達している母岩の上限は相川層の庚申塚溶結凝灰岩で、とくに盛り上がっている大立層（大立石英粗面岩と大切凝灰岩層）と相川層の左沢頁岩凝灰岩層の接触部に多く、左沢頁岩凝灰岩層の中では鉱脈が上に開いたようになって富鉱体（ボナンザ）をつくっている。相川層の右沢安山岩までは鉱脈があるが、真更川層に相当する小仏凝灰岩、金北山層に相当する海岸安山岩や鳥越安山岩の中には鉱脈がない。

主な鉱脈は東西方向の青盤脈・道遊脈・大立脈とそれに斜交する鳥越脈・中尾脈・鰐口脈・中使脈・中立脈･七助脈で、道遊脈と青盤脈は脈幅が最も大きく、35m に達する部分もあって、生産量も大きかった。鉱脈はすべて含金銀石英脈で、脈石は石英（紫水晶も含む）・氷長石・方解石・菱マンガン鉱・蛍石である。金は自然金で、銀は輝銀鉱・濃紅銀鉱・淡紅銀鉱・脆銀鉱などの銀鉱物として産する。黄銅鉱・方鉛鉱・黄鉄鉱を伴う場合もある［島津 1977a］。佐渡の金銀山には、鶴子銀山のように、金を含むが銀が多いので銀山と呼ばれているものがある。

大佐渡には多くの金銀山があるが、それらの鉱脈の方向は、佐渡方向でなく、東西方向が多いが、それと全体の佐渡の地質構造の関係は明らかでない。相川鉱山の鉱脈のできた年代は、下戸層の基底礫岩中に

金鉱石が含まれ、また西三川の砂金鉱床の存在などから、中新世中期より以前（1,650 万年前）ということはわかっていたが、近年、脈石鉱物の氷長石の K-Ar 年代が測定され、2,200 ～ 2,400 万年前という値が得られている［金属鉱業事業団 1978］。この年代は日本における新生代の金銀鉱床の中では最も古い年代である。因みに石見銀山の年代は 80 ～ 100 万年前である。成因についてはいろいろ議論がある［井沢 1993］。相川層が堆積した時代のマグマ活動に関係した浅熱水性鉱床であるが、やや深い所で形成されたもので、形成温度がやや高いようである。

相川地区は、真更川から北の部分を除く大佐渡山脈西側斜面と、南部の二見半島の大部分を含んでいる。外海府と呼ばれる海沿いの地形は、連続的に発達している海岸段丘で、海抜 200m 以下の部分がこれにあたる。段丘面は 5 ～ 6 段あり、互いに段丘崖によって隔てられている。最も下位の崖下には、隆起波食台等に由来する小規模な平地が付随し、臨海の集落とこれらを結ぶ道路の殆どがここに立地する。大佐渡山脈の斜面を下る河川は比較的短小で、主な河川で 38 本を数え、いずれも直線的な必従谷で、段丘地を塊状に分断している。段丘上は、河川の上流から用水が引かれ、よく開田されている。二見半島の七浦海岸を含め外海府海岸・大佐渡の山稜部は



第 2-1-3 図　大佐渡産地全体の地質・鉱床図（［佐渡市世界遺産推進課 2011］第 4-2-7 図を転載）

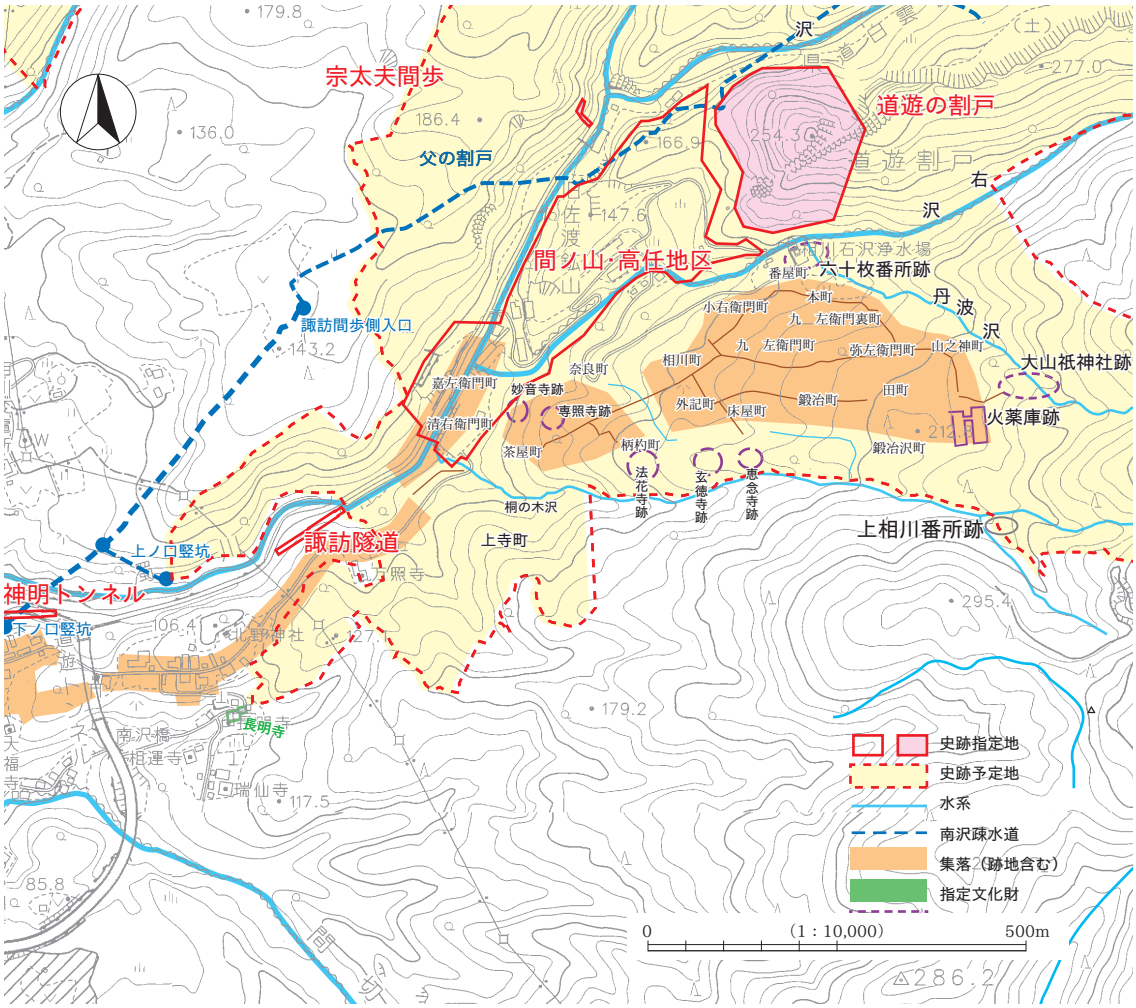
「佐渡弥彦国定公園」に、また外海府の海岸は「佐渡海府海岸」として国の名勝に指定されているが、主に火山岩から成る複雑な構成であり、これに激烈な海食作用が加わって、様々な変化がもたらされている。集落は、海岸沿いの海成段丘面上や河川によってわずかに形成された扇状地上に立地し、耕作地は主に集落背後の海成段丘面上に広がっている。集落背後の海成段丘面は河川によって深く抉られて独立し、舌状台地の形を呈して集落の背後に迫っている。これらの舌状台地から始まる尾根の上を南東へ進むと大佐渡山脈の主稜線を越えて国中平野へ向かうことができる。相川湾の入江もこうした侵食による堆積がある程度進んでいたと推測されるが、現在見られる海岸線の多くは江戸時代以降における埋立てによるものである［佐藤 1994］。相川湾より南は二見半島と呼ばれ、外海府地域とは区別されている。第四紀の中頃に活発化した隆起運動の影響が大きい区域にあたり、段丘地形がよく発達している［神蔵・小林 1993］。半島は大佐渡山脈の南端にあることから、集落背後の山は緩やかで、灌漑設備が整ってからは、内陸深くまで耕作地が広がっている。ここも地形はほとんどが台地と急斜面からなっており、集落は海岸沿いの海成段丘面に立地している。河川による侵食は、外海府地域ほど大きくない［宇佐美 2008］。

2　遺跡の位置と範囲

今回の調査範囲は、大佐渡山脈の南西部、相川金銀山と相川市街地に挟まれた山中に位置している。相川市街地は、海岸部の低地に沿って南北に延びる「下町」地域と、緩い傾斜をもった海成段丘上の東西に延びる「上町」地域からなり、T字状を呈している。さらにここより東方の山中に「山の内」地域があり、かつて上相川や間ノ山と呼ばれる初期集落があった（第 2-2-1 図）。佐渡金山遺跡は、国史跡である「道遊の割戸」のほか、父（てて）の割戸、大立竪坑、青盤間歩等を擁する間歩分布域（鉱床地域）から北沢（濁川）沿いに扇状に広がり、水金沢と間切川（南沢）によってそれぞれ隔てられた 2 つの尾根の先端近くまでの中・後期集落域が埋蔵文化財包蔵地として周知化されている。これらの尾根のうち、濁川と間切川によって形成された上町台地と呼ばれる南側の尾根は、初期～前期の相川市街と重なる部分が多く、尾根の先端部には国史跡である「佐渡奉行所跡」が立地する。また、株式会社ゴールデン佐渡の所有する佐渡金山第 3 駐車場付近は清右衛門町と呼ばれ、周辺部一帯は間ノ山という鉱山集落跡である。ここより、東側一帯に、上相川と呼ばれた初期鉱山集落跡があり［宇佐美ほか 2008］、北東には国史跡「宗太夫間歩」を始めとする鉱石採掘跡が集中している。

このほか、佐渡鉱山近代化に伴う建造物群等が現存し、鉱石の採掘から精錬・積出しまでの一連の流れを知るための格好の資料となっている。このような建造物群の分布は、概ね 6 地区に分けられ、戸地川流域の戸地地区にある戸地第一・第二水力発電所を除く 5 地区が佐渡鉱山及び相川市街地内に所在している。

佐渡金山遺跡上寺町地区は、佐渡市相川庄右衛門町・諏訪町・上寺町・次助町に所在する。同地区は、相川湾に注ぐ濁川左岸の標高 100 ～ 150m の高位段丘及びその斜面に立地し、東西約 500m、南北約 300m、面積約 0.1ha を測る。寺町の廃絶後は山野となり、樹木が繁茂している場所も多いため、寺町存続時の景観は大幅に変貌しているが、現在もテラス状遺構や石垣・石段・井戸等の遺構のほか、墓地や陶磁器類など寺院に関連する痕跡が認められ、往時の面影を偲ぶことができる。



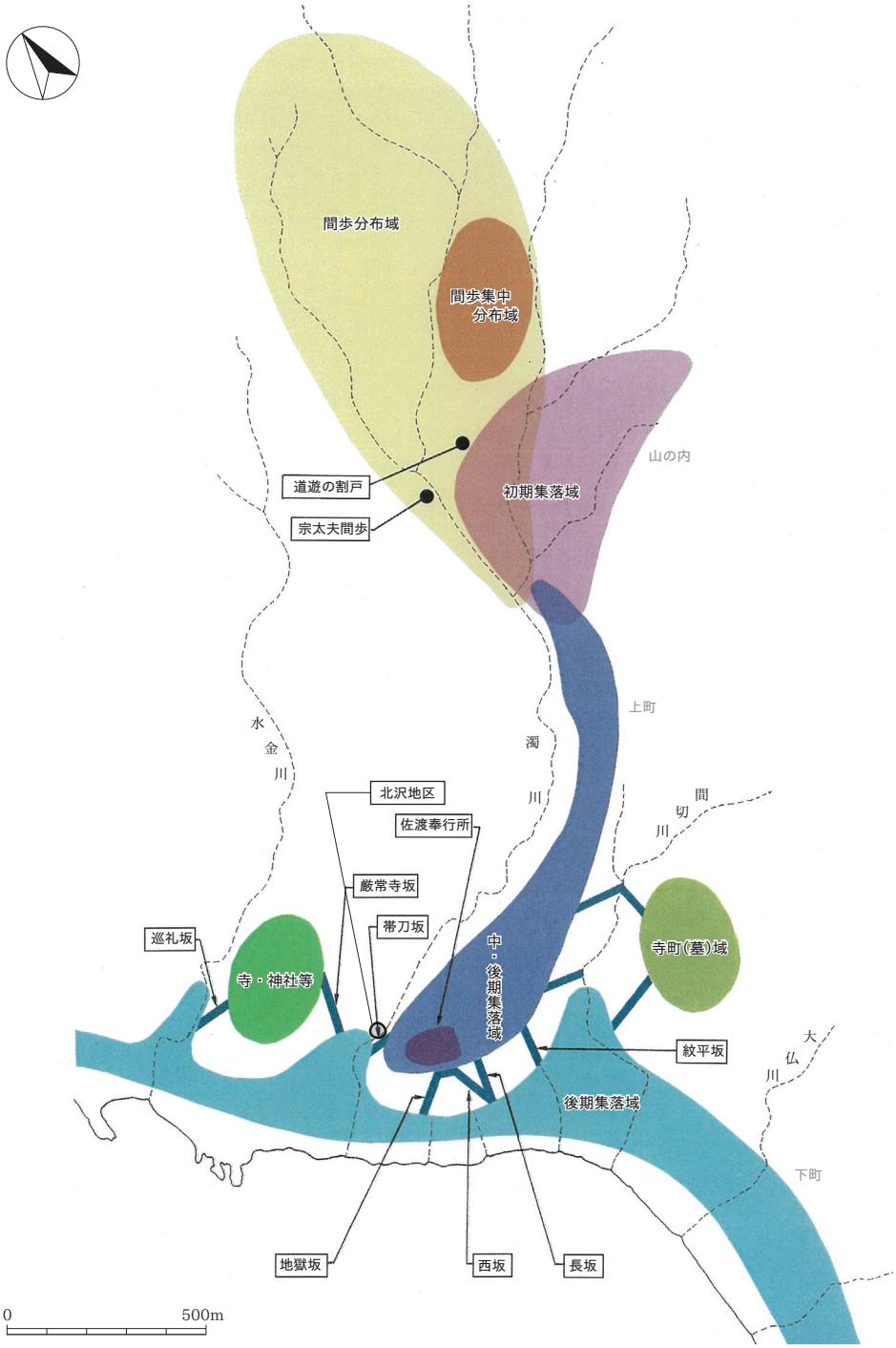
第 2-2-1 図　江戸時代の相川市街地及び佐渡金銀山遺跡分布図（[佐渡市世界遺産推進課 2012] 図 5-4 に一部加筆・修正）

3　歴史的環境

1）　相川金銀山の概要と展開

近世以前において、佐渡には西三川砂金山、鶴子銀山、新穂銀山などの金銀山が分布し、平安時代後期に編纂された『今昔物語集』には、すでに佐渡で金が採取されていたことが記されている［山田ほか 1962］。

相川金銀山は、佐渡市銀山町･下相川ほかに所在する江戸幕府の財政を支えた日本最大の金銀山である。沢根地区の鶴子銀山の発見を端緒として、鶴子銀山から山の稜線を越え、金銀鉱床の開発が進み相川金銀山が発見された。最初に開発されたのは六十枚間歩で、近接する傾斜地に上相川と呼ばれる初期の鉱山町が形成され、その様子は「上相川千軒」といわれるほどの繁栄をみせた。現在も、石組みと平坦面によって計画的に造成された宅地・道路・水路の跡などが遺構として確認でき、吉野造りと呼ばれる斜面を利用した家並みが立ち並んでいたと考えられている。その最も高所に鉱山の神である「大山祇神社」が祀られ、移住した人々とともに勧請された寺院跡も残る。当時の絵図も多数残っており、道路跡や寺社などと対比可能である。



第 2-2-2 図　佐渡金銀山遺跡の分布概念図（[相川町教育委員会 1994] 第 3 図を転載）

その後、有力な鉱脈が多数発見され、佐渡に空前のゴールド・シルバーラッシュをもたらした。国内最大級の露頭掘り跡である道遊の割戸や、国史跡の宗太夫間歩をはじめ、長大な坑道が多数残されている。慶長 6 年（1601）には、徳川家康によって佐渡金銀山は直轄地となり、佐渡は天領となった。

慶長 8 年（1603）、相川に本格的な町立て（都市計画）を試みた大久保長安によって、上相川から現在の相川に中心が移り、陣屋（現在の佐渡奉行所）を中心にして商人町の京町、鉱山労働者が居住した大工町、各種職人町などが計画的に形成された。こうして、17 世紀前半の最盛期には、人口 5 万人と推定される我が国屈指の鉱山都市が誕生することとなった。

日本の金銀山は16世紀後半から本格的に開発が行われ、17世紀前半に繁栄し、以降急速に衰退する。相川金銀山も同様な盛衰をたどるが、大規模な排水坑道である南沢疎水道の開発などの国家的なプロジェクトによって、盛衰を繰り返しながらも、幕末まで江戸幕府の財政基盤であり続けた。幕末に江戸幕府は外国人技師を佐渡に派遣し、鉱山の再開発を図ったが、明治維新を迎え、鉱山経営は明治新政府に引き継がれていった。

明治時代においても、相川金銀山は官営鉱山とし欧米の先進技術が導入され、日本初の竪坑である大立竪坑が開発されるなど、日本の近代化を牽引した。その後、明治29年（1896）に三菱合資会社に払い下げられ、昭和12年（1937）に日中戦争が勃発すると、国策による金銀の大増産体制が図られた。しかし、戦時中の乱獲の影響によって昭和27年（1952）には鉱山の大縮小を余儀なくされ、平成元年（1989）に休山となった。休山に伴い、近世の坑道跡や、明治以降の坑道・破砕場・貯鉱舎・選鉱場・積出港などの一連の近代化施設群は、三菱マテリアルの系列会社である株式会社ゴールデン佐渡に引き継がれ、現在その一部は観光施設として公開されている。

2）周辺の遺跡

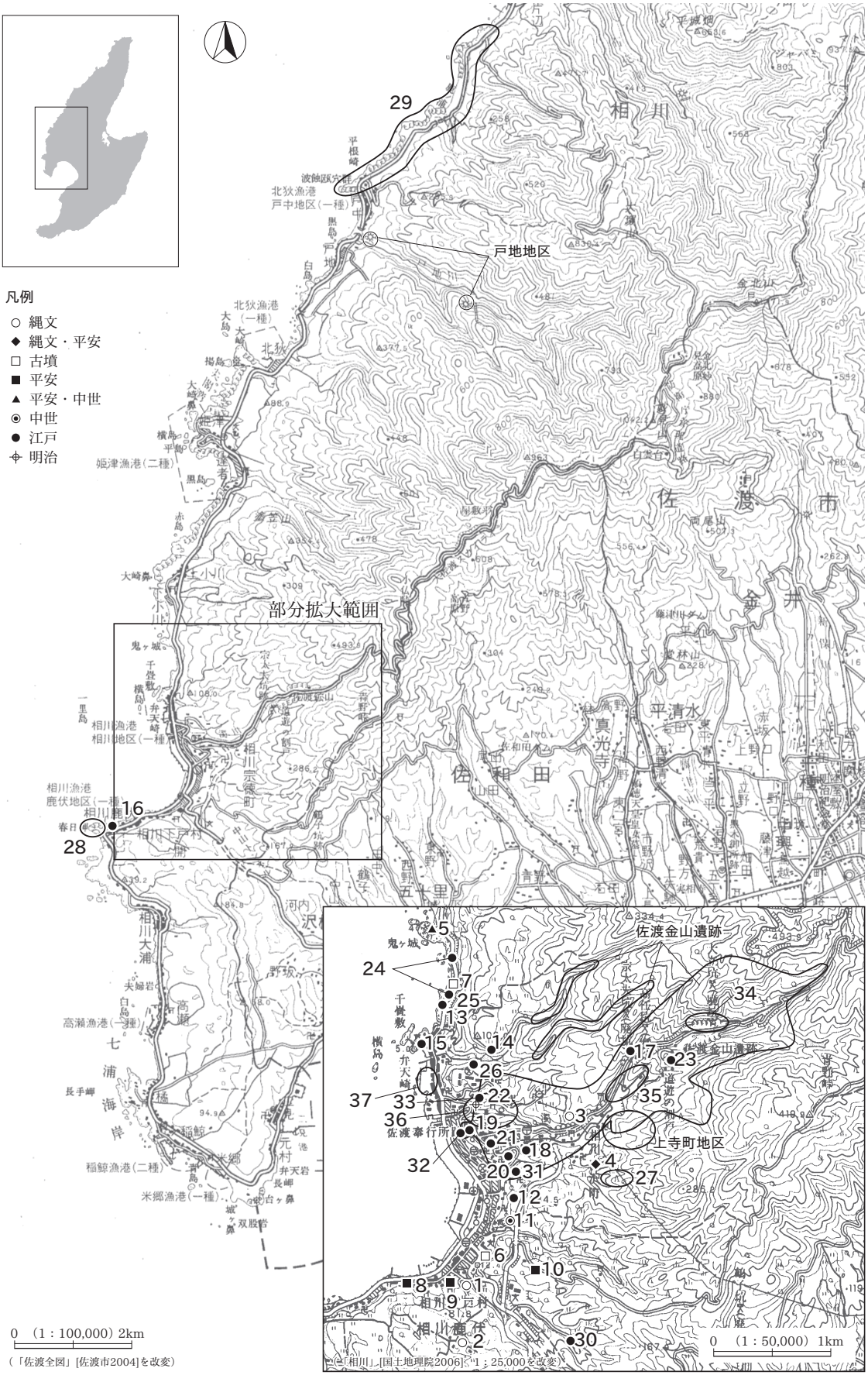
相川市街地には、街を取り囲むような形で、縄文時代、古墳時代～江戸時代の遺跡が確認されている（第2-3-1図・第2-3-1表）。これらの遺跡は、海岸部の製塩遺跡や江戸時代の墓・磨崖仏を除き、海成段丘上や台地上を中心に立地する。このうち、国史跡「佐渡金銀山遺跡」の一つである佐渡奉行所跡（19）［佐藤ほか2001］や、金太郎窯跡（12）［金沢ほか1986］等を除き、発掘調査等によってその性格が明らかにされている遺跡は少ない。

縄文時代の遺跡（1～4）では、縄文時代後期の土器、石鏃、石棒、石斧等が採集される。古墳～平安時代の遺跡（4～10）では、須恵器、土師器等が採集される。古墳時代後期には、製塩土器が採集された下相川吹上遺跡（7）のように、海岸部で製塩作業が行われている。中世には、鬼ヶ城跡（5）、羽田城跡（11）のように海岸部の舌状台地や台地端に小規模な城館が築かれる。また、下戸岩陰遺跡（6）や塩焼きの痕跡とも考えられる佐渡市相川塩屋町の赤化した海浜層［佐藤1994］は、当時の海岸線に沿って立地したものと考えられ、中世以前の人々は、海成段丘上のわずかな平坦地に居住し、段丘崖の手前まで迫る海を利用していた様子がわかる。

江戸時代に入ると金銀山の開発に伴い相川が最も発展する時代となる。国指定史跡である宗太夫間歩（17）や南沢疎水道（18）等の佐渡金山遺跡に関連する遺構や構造物（18～24）の他に、北西海岸部には佐渡奉行鎮目市左衛門の墓である県指定史跡「佐渡鉱山跡（鎮目奉行墓）」（13）、富崎・春日崎には線彫の磨崖仏（15・16）、

No.	遺跡名	時代	備考
1	向の畑	縄	
2	開	縄	
3	中山之神	縄	
4	イチカ潟	縄・平	
5	鬼ヶ城・鬼ヶ城跡	平・中	
6	下戸岩陰	古	
7	下相川吹上	古	
8	野萩	平	
9	北野天神	平	
10	道遠	平	
11	羽田城	中	
12	金太郎窯跡	江	市指定史跡
13	鎮目奉行墓	江	県指定史跡
14	水金沢窯跡	江	
15	富崎不動磨崖仏	江	
16	春日崎磨崖仏	江	
17	宗太夫間歩	江	国指定史跡
18	南沢疎水道	江	国指定史跡
19	佐渡奉行所跡	江	国指定史跡
20	大久保長安逆修塔	江	国指定史跡
	河村彦左衛門供養塔	江	国指定史跡
21	鐘楼	江	国指定史跡
22	御料局佐渡市長跡	明	国指定史跡
23	道遊の割戸	江	国指定史跡
24	吹上海岸石切場跡	江	国指定史跡
25	下相川石切場跡	江	
26	水金沢石切場跡	江	
27	大沢石切場跡	江	
28	春日崎石切場跡	江	
29	片辺・鹿野浦海岸石切場跡	江	国指定史跡
30	中山旧道	江	市指定史跡
31	寺町に至る階段	江	市指定史跡
32	西坂	江	市指定史跡
33	厳常寺坂	江	市指定史跡
34	佐渡鉱山近代遺跡　大立地区	明	国指定史跡
35	佐渡鉱山近代遺跡　高任・間ノ山地区	明	国指定史跡
36	佐渡鉱山近代遺跡　北沢地区	明	国指定史跡
37	大間地区	明	

第2-3-1表　周辺の遺跡

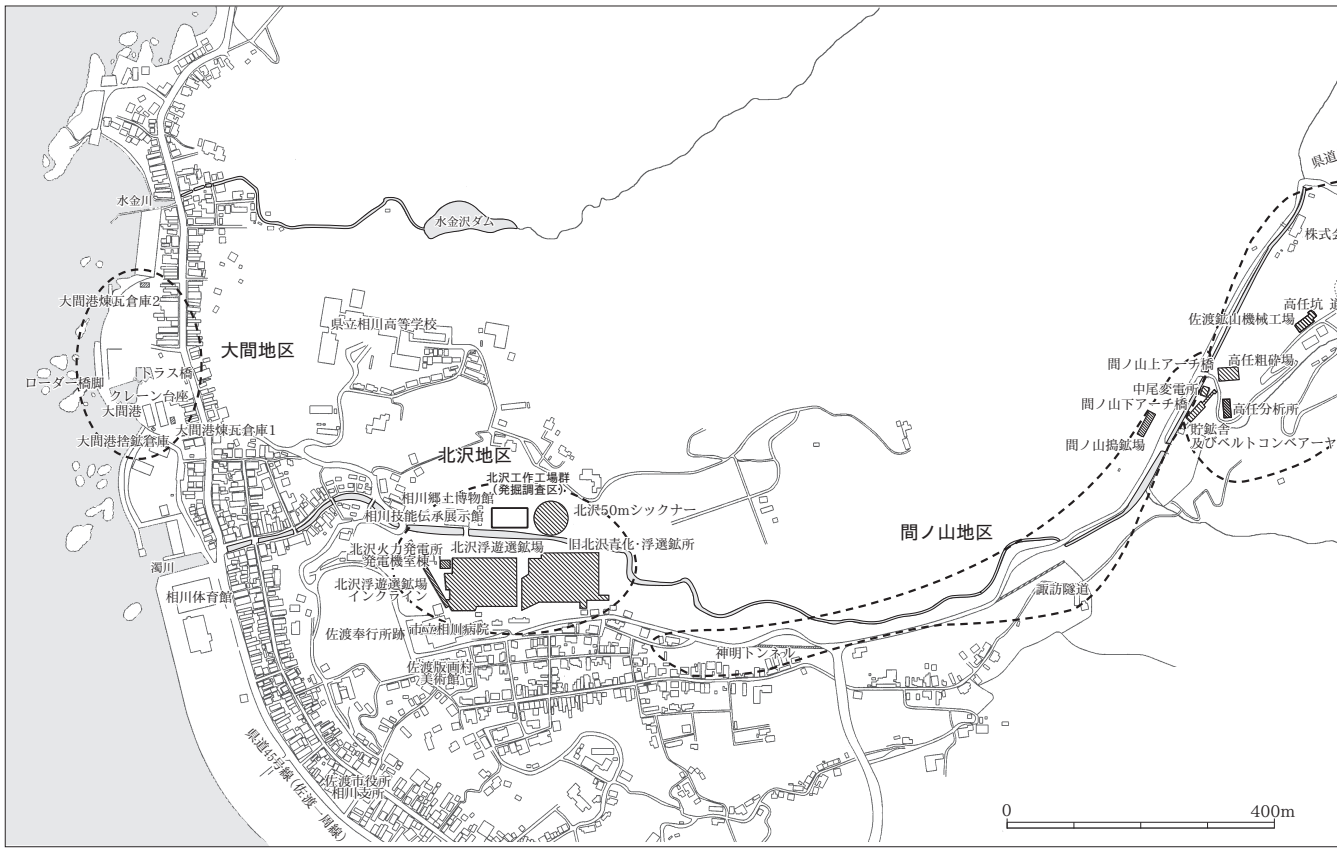


第 2-3-1 図　相川周辺の遺跡分布図

南東部には相川と金銀の積出港である小木を結ぶ峠越えの中山旧道（30）がある。段丘斜面には、金太郎窯跡（12）、水金沢窯跡（14）といった陶器の窯跡のほか、上町と下町を結ぶ石段（31 ～ 33）がみられる。近年には佐渡金山遺跡内を通る県道白雲台・乙和池・相川線の道路沿いに水路が建設された際、土中から江戸期の坑道が発見された事例もあり、近世以降に発生した水害によって埋没している坑道が発見されることがある。また、平成 21 ～ 24 年度に行われた佐渡金山遺跡内の相川上下水道に伴う確認調査では、水道敷設予定範囲内で、宅地境界に築かれた石垣が検出されており、江戸期の小路が近代以降に至って道路拡幅されていたことが判明している［佐渡市教育委員会 2010、川村ほか 2011、同 2013］。

市街地の中心部で確認される遺跡は少なく、これは、同地が金山の発展に伴う人口増によって、海岸部の埋め立てや度重なる建造物の新築・建替えによって拡大した場所であるためと推定される。特に下町と呼ばれる海岸部では、17 世紀初頭から 18 世紀初頭にかけて行われた埋立てによって造成された場所が多く、中世以前には海浜又は低湿地が広がっていたと考えられる。しかし、近年、相川小学校の建設工事に伴って発見された下戸岩陰遺跡（6）や、相川測候所建設工事に伴って発見された向の畑遺跡（1）のように、大規模な開発に伴う遺跡の発見や、段丘辺縁部に位置する佐渡奉行所跡（19）に近接した南の低地部において、郵便局や商店の工事の際に多量の近世遺物が出土した例がある。また、佐渡市教育委員会で実施した聞取り調査では、市街地周辺に近世以降の石切場（24 ～ 28）が分布していることも判明している［宇佐美 2009］。

明治以降の遺跡では、佐渡鉱山の近代化に伴う施設群が残る［佐渡市教育委員会 2008］。大立地区（34）には明治 10 年（1877）に完成した日本初の竪坑である大立竪坑があり、間ノ山・高任地区（35）には、昭和 13 年（1938）年以降に更新された破砕場・貯鉱舎・機械工場などの施設が現存する。北沢地区（36）



第 2-3-2 図　旧佐渡鉱山施設分布図

は選鉱・製錬の拠点であり、明治期の青化ふ選鉱所・火力発電所、昭和 10 年代の浮遊選鉱場・シックナー等が残るほか、鉱山事務所として使用された旧御料局佐渡支庁跡（22）の建物がある。なお、近年の調査により、明治～昭和初期にかけての鉱山用機械部品の製造工場群跡が発見された［宇佐美ほか 2010］。大間地区（37）は鉱山物資の搬入・積出港として整備された大間港があり、コンクリート普及以前の人造石（たたき）工法による護岸や、クレーン台座・ローダー橋脚・煉瓦倉庫等が残されている。

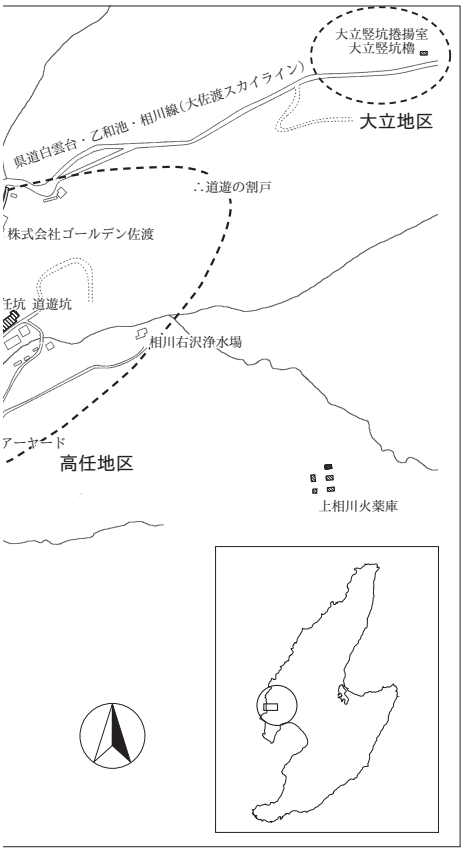
3）上寺町地区の歴史的環境

A　立地と歴史的背景

大佐渡山脈から上町台地に至る高位段丘上に立地する近世の相川市街地の一部で、初期鉱山集落が形成された上相川地区と間ノ山地区と桐木沢を挟んで南側、上町地区北東部に当たる地区で、北側より庄右衛門町・諏訪町・次（治）助町・上寺町の 4 つの町がある（第 2-3-3 図）。

町の詳細な成立時期は不明であるが、慶長年中にはすでに諏訪町が成立し、慶長 12 年（1607）には浄土宗源昌寺が開基［田中 1968］。以降、1620 年代までに多くの寺院が建立していることから、少なくとも江戸時代前期には町並が形成されていたと考えられる。しかし、宝暦年間を境に寺院所在地から次第に上寺町の町名が使われなくなっていくことから、同町の寺院を除き人家が退転したため、町並が消滅していったと推測される。文政 9 年（1826）の「相川町町墨引」によると鉱山勝場床屋関係者･買石･地役人･奉公人・職人・針仕事師等が居住していたことが判明している［相川町史編纂委員会 1983］。

近代以降も引き続き同地域には町が存続しており、明治時代には鉱山へ労働力を供給していた太田部屋･大塚部屋・佐藤部屋といった部屋頭の住居があった。また、昭和 10 年代には濁川沿いに鉱車軌道が敷設され諏訪町合宿所（鉱山長屋）が建てられたが、鉱山の縮小と共に人家が減少していった［相川町史編纂委員会 1995］。



現在、諏訪町に所在する浄土真宗万照寺を残して人家はすべて退転しており、町割の形状を残す宅地と石積・寺跡・墓地の遺構のみが残されている。

B　町の概要

①　庄右衛門町

大久保長安によって佐渡へ呼ばれた二の山仕（山師）であった大坂庄右衛門が開発したとされる町で、山師の人名から名付けられた町。『佐渡相川志』によれば、町屋敷 8 反 1 畝 16 歩（≒ 8,071.8m^2）であったとされる［田中 1968］。

文政 9 年（1826）の「相川町町墨引」では、家屋敷 25 軒、夜番所 1 軒が描かれており、家大工・針仕事師のほか、鉱山関係者が多く居住していた（第 2-3-2 表、第●図）［相川町史編さん委員会 1983］。

昭和期まで人家があったほか、濁川沿いに軌道及び鉱山長屋（労働者住宅）があり、この頃のものと思われる宅地石垣や石積の軌道跡、河川護岸が残る。

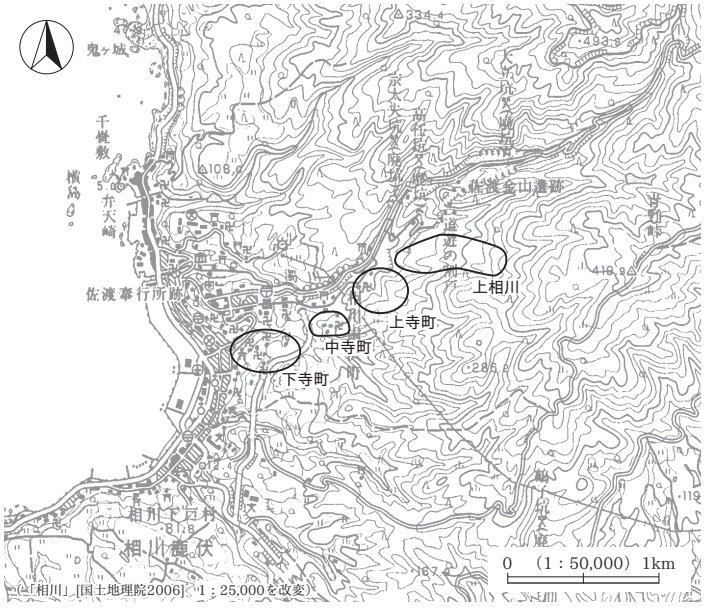
②　諏訪町

慶長年中に信州諏訪出身の人物が来島して開発したとされる町で、そこから諏訪町と名付けられた。開発者は諏訪殿と呼ばれ、諏訪間歩の開発を行ったといわれている。『佐渡相川志』によれば、元禄検地の際に町屋敷 6 反 5 畝 15

歩（≒ 6484.5m²）があったとされる［田中 1968］。

文政 9 年の「相川町町墨引」では家屋敷 42 軒、明（空）屋敷 1 軒、明（空）家 3 軒、寺 1 ヵ寺（万行寺）、地水替寄宿 1 軒があったとされる。職業的には出入奉公人が 11 人で最も多く、以下、庄右衛門町と同様に、鉱山関係者や針仕事師、家大工などが住んでいた（第 2-3-2 表、第●図）［相川町町史編纂委員会 1983］。

現在、人家は退転しており、浄土真宗寺院の万照寺のみが残る。

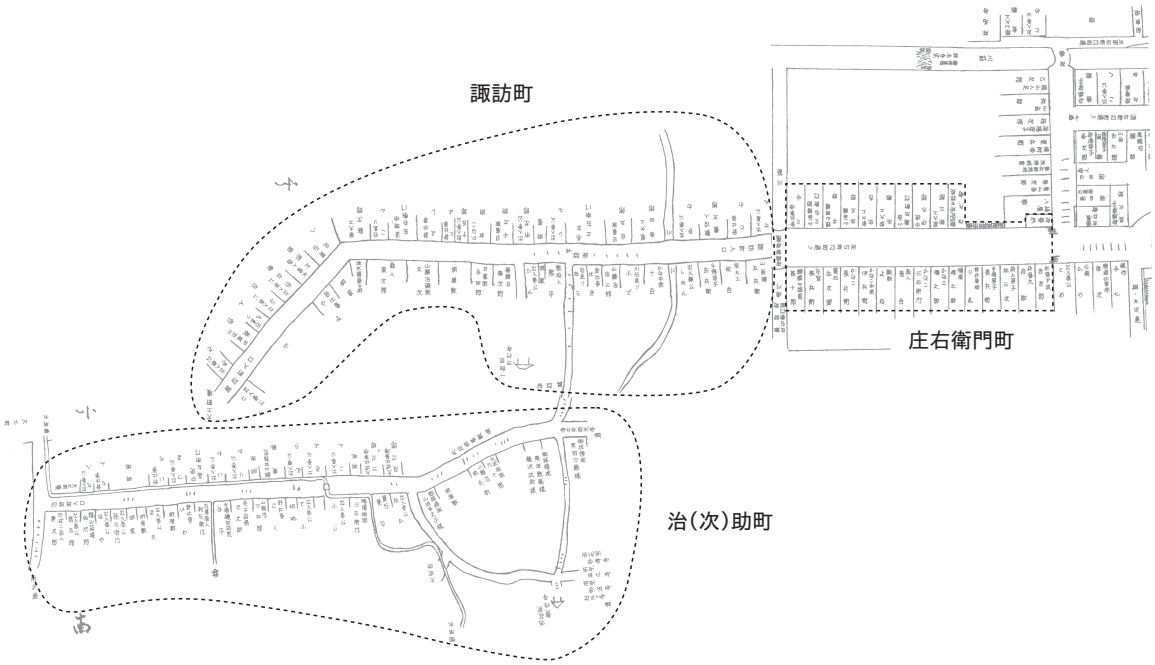


第 2-3-3 図　上寺町地区位置図

③ 次助町

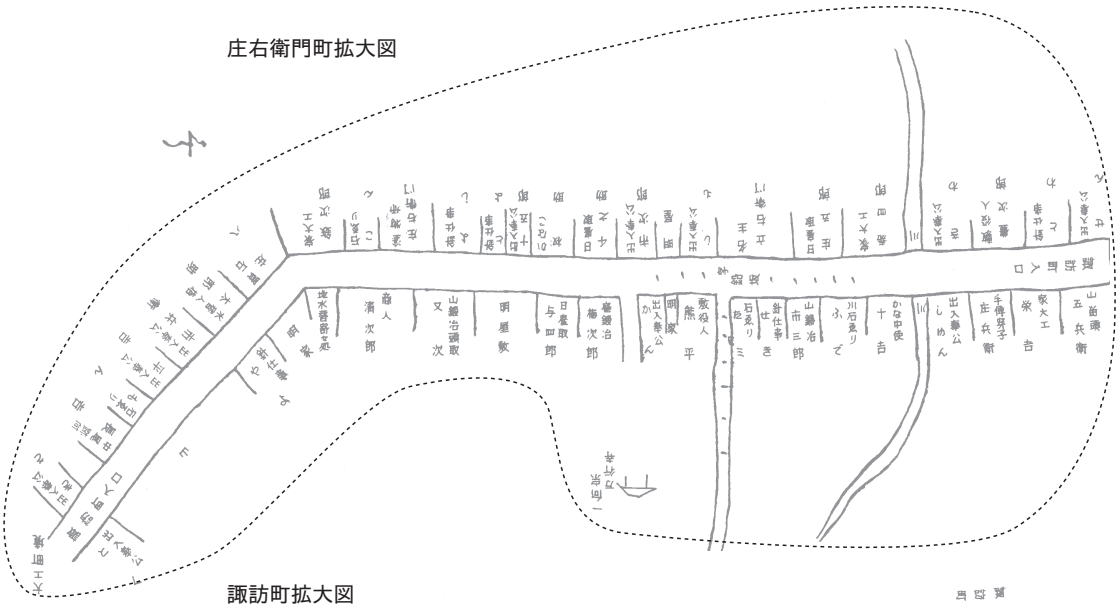
人名の名付けられた町で史料によって治助町の町名が使われることもある。『佐渡相川志』によれば、町長さ 230 間（≒ 418.6m）、御陣屋（佐渡奉行所）まで 8 丁（町）25 間 3 尺（≒ 1,008.4m）、畑 1 反 5 畝 8 歩（≒ 1,511.4m²）、町屋敷 1 反 4 畝 16 歩（≒ 1,438.8m²）であったとされる［田中 1968］。

文政 9 年の「相川町町墨引」では、家屋敷 41 軒、明（空）屋敷 2 軒、明（空）家 1 軒、寺 5 ヵ寺（西光寺・妙伝寺・法久寺・妙法寺・覚性寺）、大吹所 1 軒、明地 4 ヵ所があったとされ、通りに沿って用水路が配置されている。諏訪町と同じく出入奉公が 14 人で最も多いが、大吹所があった影響から、大吹仕事師・大吹板取といった製錬関係者も居住しており、このほか、御拝領地住役人や古着・たばこ商人などもみえる（第●表、第●図）［相川町史編纂委員会 1983］。

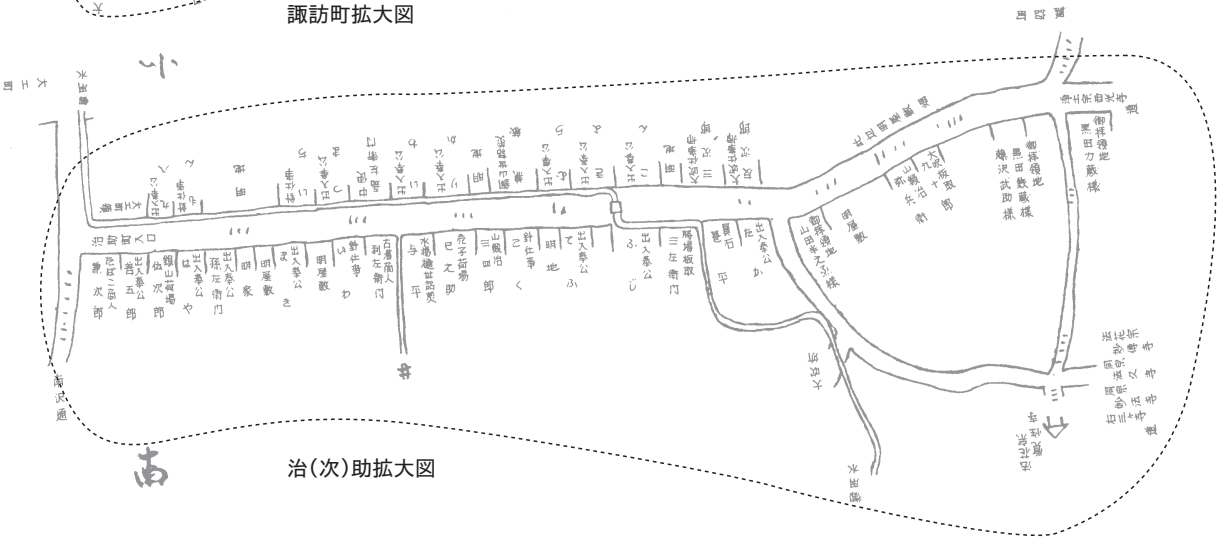


第 2-3-4 図　文政 9 年（1826）当時の庄右衛門町・諏訪町・次助町（「相川町町墨引」を一部加工）

庄右衛門町拡大図



諏訪町拡大図



治(次)助拡大図

第 2-3-4 図　文政 9 年（1826）**当時の庄右衛門町・諏訪町・次助町拡大図**（「相川町町墨引」を一部加工）

明治 26 年（1893）には、大塚部屋が置かれ、昭和まで部屋頭の邸宅が残っていた［相川町史編纂委員会 1995］。現在、人家はなく、寺院跡のみが残る。

④ 上寺町

寺院の集中した町。上町台地上にはこの町と対応する町名として中寺町・下寺町の名がみられる。宝暦年間頃には、人家が退転していったためか、『佐渡相川志』に町名は記載されていないが、寺の所在地名より次助町境沢（元禄検地に畑 8 畝 24 歩（≒ 871.2m^2）、町屋敷 4 反 4 畝 22 歩（≒ 4,428.6m^2）、今人家なし）が上寺町に該当すると考えられる［田中 1968］。

文政 9 年の「相川町町墨引」には、中寺町・下寺町と同様に記載がなく、寺町という性格上、描写の対象外となったものと想定される。

現在、人家は無く、寺院跡のみが残る。

4）寺院の変遷と概要

A　寺院の立地と変遷

上寺町地区における江戸～昭和時代の寺院数は 12 ヵ寺で、宗派別では、日蓮宗 5･浄土宗 2･浄土真宗 2･臨済宗 2・不明 1 となる。

このうち、開基年代の最も古い寺院は、慶長 12 年（1607）に庄右衛門町に建てられた浄土宗源昌寺で（史●）、以下、慶長 16 年の臨済宗興禅寺（史●）と元和元年（1615）の浄土宗西光寺（史●）が次助町に開基する。

寛永年間からは日蓮宗寺院の進出がみられ、寛永元年（1624）に妙法寺が建立され（史●）、寛永 6 年には法久寺の前身の法円寺（法休寺）（史●）と妙伝寺の前身の法華堂（寺）が上相川岩崎町から上寺町に移転している（史●）。このほか、年代は不明であるが、妙円寺も鶴子四十物町から次助町に移転しており（史●）、鶴子から相川へ金銀山の中心が移ったことを理由に、他の日蓮宗寺院と同様にこの地に移ってきたものと想定される。

その後も寺院の退転は続き、正保 3 年（1646）に臨済宗慈徳寺（開基年代不明）が廃寺となった際には、その跡地は同宗派の興禅寺の支配下に入り（史●）、承応 3 年（1654）以前には浄土真宗浄願寺も次助町に存在していたことがわかる（史●）。元禄年間（1688 ～ 1703）には、浄土真宗寺院の相川山ノ内（銀山町）の誠証寺と次助町の浄願寺が合併して諏訪町に万行寺が建てられ（史●）、上相川上山ノ神町の日蓮宗覚性寺が次助町に移転している（史●）。また、享保 2 年（1717）に次助町の日蓮宗妙円寺が下寺町の現在地に移り（史●）、同年、上寺町からいったん下大坂町へ移転していた（時期不明）日蓮宗妙伝寺が妙円寺跡地に移っている（史●）。この元禄～享保期が上寺町地区で寺院数が最も多かった時期で、計 8 ヵ寺（日蓮宗 4・浄土宗 2・浄土真宗 1・臨済宗 1）が同時併存していた。

しかし、それ以降は衰勢の一途をたどり、慶応 3 年（1867）、焼失した浄土宗西光寺の源昌寺への合併を皮切りに（史●）、明治に入ると日蓮宗覚性寺と浄土宗源昌寺が廃寺、日蓮宗妙伝寺は福島県磐城へ移転した［相川町役場 1927］。その後も、大正 14 年（1925）には日蓮宗妙法寺が山形県へ移転、昭和 2 年（1927）には臨済宗興禅寺は廃寺状態となり［相川町役場 1927］、昭和 17 年には日蓮宗法久寺も下寺町の法輪寺へ合併し［斎藤ほか 2003］、現在は浄土真宗万照寺（昭和 17 年に上相川の専照寺と合併して万行寺から万照寺へと改称［相川町史編纂委員会 1986］）を残すのみとなっている（第 2-4-1 図）。

次に、各寺院の位置関係を示す資料として、相川金銀山や相川市街地を描いた江戸時代の絵図資料があげられる。現在、40 点ほどの絵図が確認されており、このうち、上寺町地区の寺院の様子がうかがえる

資料として、以下の７点を抽出した。

１点目は、元禄７年（1694）当時の相川金銀山と諏訪町以東の町並みを描いた「相川左沢右沢向山銀山図」（第 2-4-2 図）で、上寺町地区には浄土宗２（西光寺・源昌寺）、臨済宗１（興禅寺）、日蓮宗３（法久寺・妙法寺・妙伝寺）の計６ヵ寺が記されている。それぞれの位置関係をみると、次助（町）の東に西光寺が位置し、その南東斜面に北から源昌寺・興禅寺・妙伝寺・妙法寺・法久寺の５ヵ寺が連続して並んでいる。

２点目は、元禄８年（1695）の相川の町並みを描いた「佐州相川之図」（第 2-4-3 図）である。ここでは、第 2-4-2 図にみられなかった浄土真宗万行寺が諏訪町の南側に、日蓮宗妙円寺が西光寺の南の泉沢を挟んだ向かい側斜面に記されており、この時点で誠証寺と浄願寺の合併が完了して万行寺が建立されていたことと、享保２年（1717）に下寺町（南沢）へ移転する以前の妙円寺が上寺町に所在していたことが絵図資料からも明らかとなった。一方で、元禄年間（1688 ～ 1704）に上山ノ神町から次助町に移転する日蓮宗覚性寺は描かれておらず、元禄８年の段階ではまだ移転していなかったと想定される。

３点目は、明確な年代は不明であるが、南沢疎水道開削直後の元禄９年（1696）頃の町並みを描いたと想定される「相川町図」である（第 2-4-4 図）。ここでは、これまで妙法寺の北に隣接していた妙伝寺が存在しないことから、妙伝寺の下大坂町への一時移転は元禄８～９年の間である可能性を指摘できる。

凡例：庄＝庄右衛門町　諏＝諏訪町　次＝次助町

職業（種別）	人数（女世帯）		
	庄	諏	次
寺院（寺院）		1	5
御拝領地住役人（地役人）			4
買石（買石）	1	1	1
敷役人（鉱山関係）		2	
銀山岡頭（鉱山関係）	1		
銅山世話煎（鉱山関係）			1
銅稼ぎ世話煎（鉱山関係）	1		
中尾（間歩）跡向（鉱山関係）		1	
かなこ中使（鉱山関係）	1	1	
かなこ（鉱山関係）	3	1	
荷揚穿子（鉱山関係）	1		
手伝穿子（鉱山関係）	1	1	
銀山荷揚（鉱山関係）			1
雲子（間歩）荷揚（鉱山関係）			1
山留頭（鉱山関係）	1	1	
山留頭助（鉱山関係）	1		
山留（鉱山関係）	1		
山鍛冶頭取（鉱山関係）		1	
山鍛冶（鉱山関係）		1	2
水替下改（鉱山関係）	1		
水替人指（鉱山関係）		1	
水揚樋世話煎（鉱山関係）			1
石撰（勝場・製錬関係）		3（3）	
川石撰（勝場・製錬関係）		1（1）	
御問吹所世話煎（勝場・製錬関係）	1		
大吹仕事師（勝場・製錬関係）			2
板取（勝場・製錬関係）	1（1）		
大吹板取（勝場・製錬関係）			1
勝場板取（勝場・製錬関係）			1
日雇取（日雇）		3	
出入奉公（奉公人）		11（7）	14（11）
家大工（職人）	3	3	
桶屋（職人）	1		
左官（職人）	1		
塗物師（職人）		1	
雇鍛冶（職人）		1	
針仕事師（師）	2（2）	5（5）	4（4）
商人（商人）	1	1	
古着商人（諸商売）			1
たばこ商人（諸商売）			1
中使（その他）	1		1
夜番太（その他）	1		
名主（その他）		1	
計	25	42	41

第 2-3-2 表　文政９年（1826）当時の庄右衛門町・諏訪町・次助町の家数・職業等集計

町名	家数	竈（世帯）数（女世帯）	土蔵	納屋	空屋敷	空家	空地	元禄７年（1694）検地家数
上相川 茶屋町 奈良町 相川町 外記町 床屋町 小右衛門町 九郎左衛門町	38	40（5）					約 30	321 空屋敷 38
庄右衛門町	25	25（3）						62
清右衛門町	31	31（6）						25
嘉左衛門町	30	30（8）						36
五郎右衛門町	3	3（1）						30 空屋 4
宗徳町	1	1（0）						18
諏訪町	42	42（16）			1	3		50
大工町	94	95（18）				1		82
左門町	29	29（2）		1		3		38
大床屋町	12	12（4）			6			19
新五郎町	40	40（1）						35
六右衛門町	33	33（6）			18			55
治助町	41	41（15）			2	1	4	70
上京町	43	44（3）				2		28
中京町	33	33（1）		1				23
下京町	35	35（2）						20
八百屋町	21 （内２軒同一人）	20（1）						13
会津町	15	15（0）						29
四十物町	62	62（6）			2	1		40
弥十郎町	62	62（4）			2		1	23
夕白町	32	33（1）			9	2		37 空屋 1
勘四郎町	1	1（0）						14 空屋 3
米屋町	79	79（1）			3	5		49
味噌屋町	18 （内２軒出店）	17（0）						11
長坂町	33	33（4）						28
西坂	5	5（0）						
水金町	16	16（2）						7
柴町	127	127（9）				3		73
大間町	81	81（2）		1			1	54
濁川町	56	56（7）						35
紙屋町	51	51（4）		2				26
坂下町 北沢 炭屋町 下山之神	155	155（13）						73 空屋 4

第 2-3-3 表　文政９年（1826）「相川町町墨引」による各町ごとの建物等の集計

町名	神社	寺 院	修験	地役人町同心	御役所詰医師	町医師	山師	買石	鉱山関係	勝場・製錬関係	小判・銀貨・銭鋳造	絵図師振矩師	湯屋	日雇い	奉公人	職人	針仕事（師）	商人	諸商売	その他・備考
上相川 茶屋町 奈良町 相川町 外記町 床屋町 小右衛門町 九郎左衛門町	（1） 4カマド	3	1						23	3				4			3			名主1・畑百姓2 （法華寺・専念寺・妙音寺の他、上相川鍛冶町に専念寺・玄徳寺の2ヶ寺、上山之神に大山祇神社あり）
庄右衛門町								1	11	2						5	2	1		名主1、中使1、夜番太1 夜番所あり
清右衛門町									12	4	1		1	1	2	2	1	4		帳付師1、按摩取1、猟師1 （夜番所）
嘉左衛門町									16	2				1	3	2	2	3		名主 （夜番所）
五郎右衛門町		1							1						1					（称名寺）
宗徳町																		1		（間ノ山口御番所）
諏訪町		1						1	10	4				3	11	5	5	1		名主1、地水替寄場1 （万行寺）
大工町			2	2	2 （諸医師格1）		2	2	21	10				6	4	15	13	8	4	料理屋1、按摩取1、番太1、名主1 （夜番所）
左門町		2		9			2		3	1	1			4	3	3				不明1 （西念寺･蓮光寺）（夜番所）
大床屋町				4						2				2	3					道心1
新五郎町				2			2		14	3		1 振矩師		8	1	1		2	1	番太1、名主1、中使1、不明2 （夜番所）
六右衛門町		3	1	2	1	1	1		12	2				2	5	1	1			寺隠居1 （広伝寺・大福寺・広円寺）
治助町		5		4				1	6	4					14		4		2	中使1、大吹所1 （西光寺・妙伝寺・法久寺・妙法寺・覚性寺）
上京町				4			3		8	7				3	1	5	2	2	3	御鉄砲師1、帳付師2、番太1、名主1、髪結1
中京町				11		1	2		1	3				1	1	4	1	5	1	屋守1、中使1 （番所・夜番所）
下京町				6		1 （旅医師）			1					8		1	2	2	3	郷宿4、定促4、名主1、町奉行1、不明1 （夜番所1）
八百屋町				5					2					2		3	1	2	1	定人足1、髪結1、時鐘つき1、按摩1 （時鐘楼）
会津町				11	1	1														町会所守1、不明1
四十物町				10		1			12	5			1	10	6	2	1	2	1	諸役所小遣4、御林下改1、定人足2、郷宿1、御用炭世話煎1、せんたく師1、中使1
弥十郎町	（1） 無カマド	1		15		1		1	3	17				3	2	3	2	1		定人足7､番太2､按摩取1、御林下改1、役所下番1 （大願寺）（天神）
夕白町	（1） 無カマド		1	10					5	5				3	1	3		1		定人足1 （夜番所）（神明）
勘四郎町				1																
米屋町		1		9	1	1			8	8	3	1 絵図師	2	9	2	9	1	2	12	定人足6、料理屋1、役所小遣1、髪結2、名主1、中使1 （夜番所）（願泉寺）
味噌屋町				2					2					1		2		4	1	郷宿1、名主兼郷宿1、郷宿助1、番太1、中使兼豆腐屋1
長坂町				2						5				3	1	17	2			提灯並帳付1、御役所下番1、牢屋下番1 （夜番所・牢屋）
西坂				2					1							2				
水金町																	1			売女屋11（内1中使）、漁師3、番太1
柴町	（2） 無カマド	2	2						12	5			1	19	2	14	8	16	18	駄賃持6、漁師5、四十物師5、鍼治導引2、問屋6、御番所小遣1、番太1、帳付師1、中使1 （天神・風ノ宮）
大間町		1	1	2		1			3	1			1			11	2	9	8	駄賃持26､四十物師4（内1飴屋兼）、御用炭下改1、小揚頭1、髪結1、漁師1、物書1、按摩1、御番所小遣1、筋見1、町年寄1、名主1、中使1 （願龍寺）
濁川町			1	2					3	3	1		1	2	10	4	2	7	7	漁師4、鑑札持2、荷揚1、髪結1、不明7 （番所）
紙屋町		1	2	2		1			2	5			1	6	6	3	3		3	小揚4、鑑札持2、料理屋2、漁師1、髪結1、番太1、按摩1、名主1、中使1、不明2
坂下町 北沢 炭屋町 下山之神	（3） 無カマド	9 他に無住寺1	1	30	1				12	23	1			9	4	11	6	6	3	小揚15、納米人足8、御普請所小屋1、御普請所定人足1、番太1、畑百姓1、阿弥陀守1、御役所下改1、社人2、下社屋1、御米蔵敷地住町人5、名主1、中使1 （厳常寺・法泉寺・長泉寺・大乗寺・総源寺・勝善寺・了円寺・光楽寺・教寿院）（愛宕・大山祇・八幡）

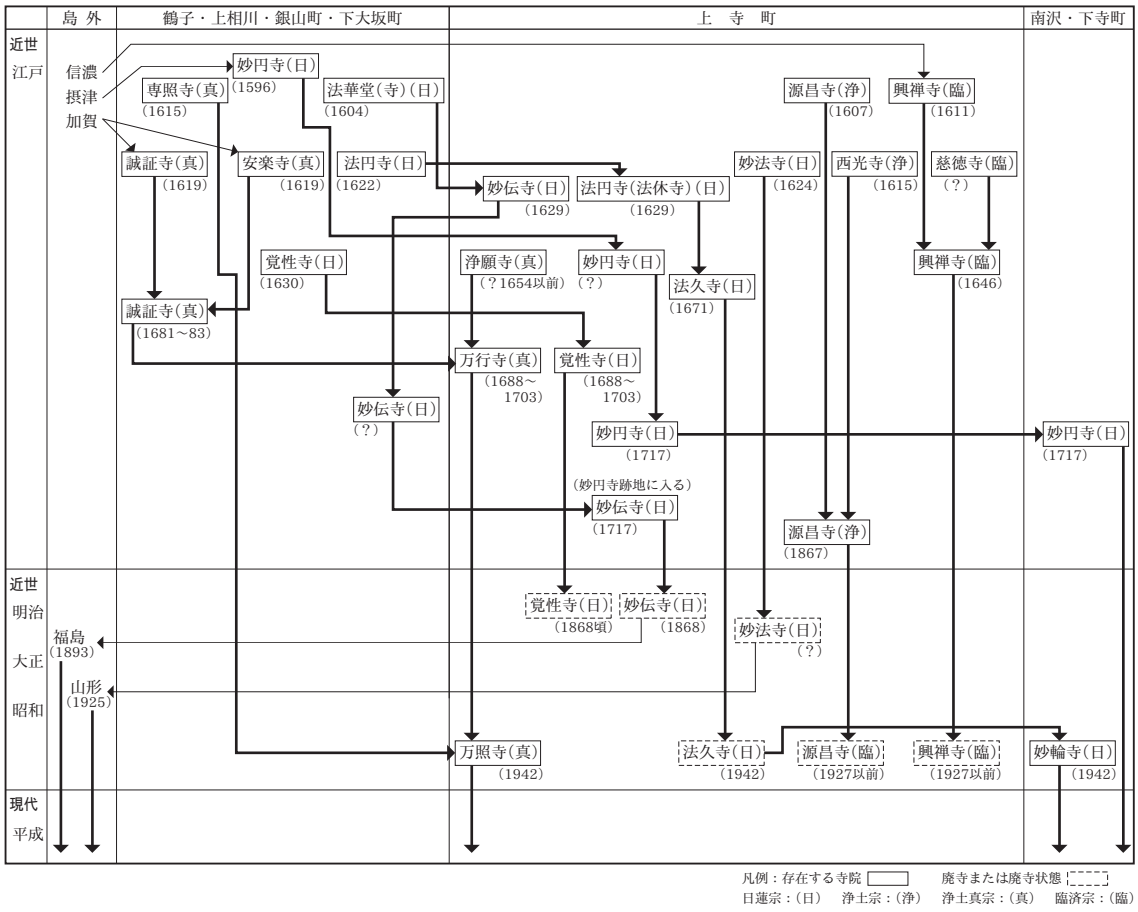
第 2-3-4 表　文政９年（1826）「相川町町墨引」による各町ごとの職業集計

これら各寺院の位置関係をみると、先に述べた上寺町地区の形成と関連しており、慶長～元和期に浄土宗・臨済宗寺院が比較的鉱山に近い上寺町地区の下部斜面に、その後多少遅れて寛永期に日蓮宗寺院が中部斜面に進出してきたものと考えられる。

4点目は、延享4年（1747）年の相川金銀山と諏訪町以東の町並みを描いた「銀山岡絵図」である（第2-4-5図）。この絵図は、白・墨等で訂正または修正された箇所が多く、他の絵図作製に伴う下絵の可能性がある。ここでは、西光寺から東の寺院を確認することができ、妙伝寺移転後の状況は第2-4-4図と変わっていない。

5点目は、延享5年（1748）～宝暦7年（1757）頃の相川の町並みを描いた「相川町絵図」で（第2-4-6図）、絵図の中では最大の8ヵ寺（日蓮宗：法久寺・妙法寺・妙伝寺・覚性寺、浄土宗：源昌寺・西光寺、浄土真宗：万行寺、臨済宗：興禅寺）が記されている。元禄8年（1695）の第2-4-3図と比べると、元禄年間に上山ノ神町から次助町へ移転した覚性寺、享保2年（1717）に上寺町から南沢へ移転した日蓮宗妙円寺、同年妙円寺跡地に移転してきた妙伝寺が描かれており、上寺町地区の最終的な寺院の位置関係を知る上で基準となる資料といえる。

6点目は、文政6年（1823）～天保9年（1838）の相川金銀山および町並みを描いた「相川町々并銀山岡絵図」である（第2-4-7図）。18世紀中期の第2-4-6図と比較しても、寺院同士を結ぶ道が多少簡略化されている以外は寺院配置も酷似しており、19世紀前半の段階でもその様子は大きく変わることなく推移していることがわかる。



第2-4-1図　上寺町寺院変遷図

7点目は、安政5年（1858）の大火による町場の焼失箇所を描いた「安政度相川御陣屋并市中焼失場絵図」である（第2-4-8図）。安政の大火によって被災した範囲を示すことが主目的であるため、詳細な描写はなされていないが、西光寺から東の上寺町5ヵ寺については、第2-4-7図に引き続いて描かれていることから、幕末に至るまで各寺院は存続していたと想定される。

このように、複雑な寺院の変遷がみられるが、上寺町の成立には大きく3つの段階があると考えられる。1つ目は慶長～元和期にかけての庄右衛門町・次助町を中心に浄土宗・臨済宗寺院が開基する形成期、2つ目は寛永期の上寺町を中心に日蓮宗寺院が進出する発展期、3つ目は元禄～享保期にかけての寺院の合併や移転が進む成熟期である。

その後、幕末までは寺町としての機能は維持されてきたものの、明治から昭和前期にかけて統廃合が進み、現在諏訪町の浄土真宗万照寺が所在する以外は、山中に寺跡や墓地・石垣等の遺構が広がっている。

B　各寺院の概要

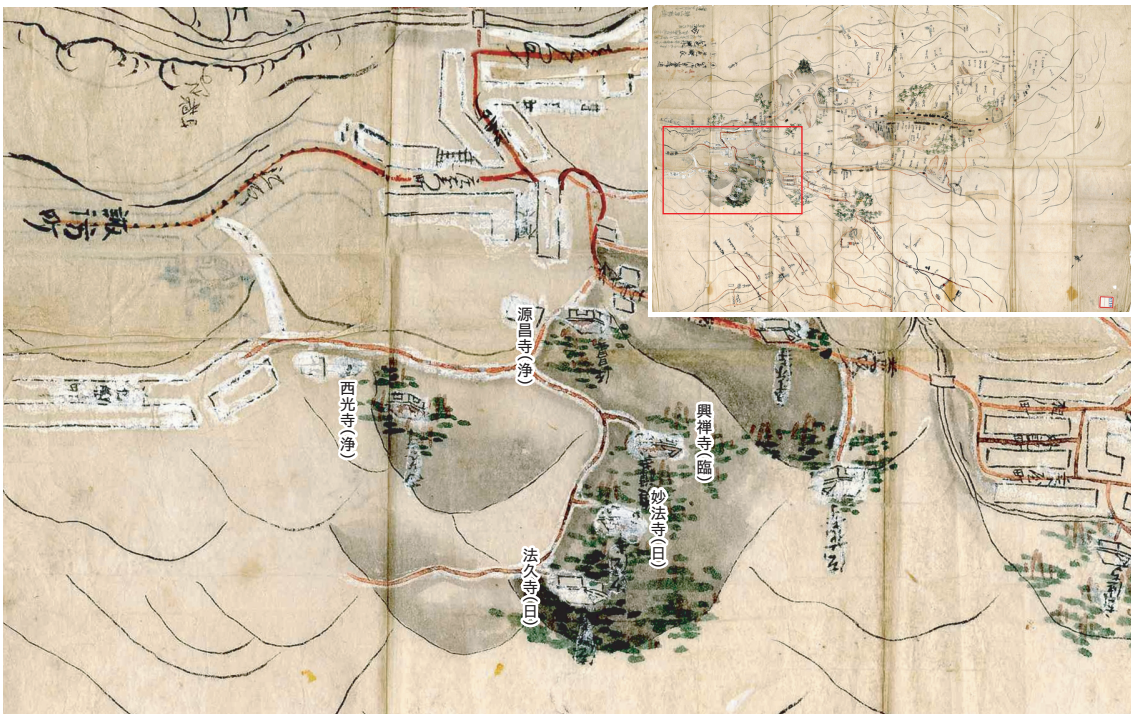
①　万照寺（浄土真宗：諏訪町字鉛坂）

諏訪町のほぼ中央部、鉛坂付近の南側斜面に位置する。京都東本願寺の末寺で、元和5年（1619）、加賀国出身の僧空乗が相川山ノ内（銀山町）に証誠寺と安楽寺を開基したことに始まる［新潟県仏教会1983］。元禄年間（1688～1704）に山ノ内（銀山町）の証誠寺と次助町の浄願寺が併合して万行寺となり、現在地に建立されたものと想定される。境内地は5畝5歩～15歩（≒511.5m^2～544.5m^2）（史●·●·●）。

第2-4-2図　「相川右沢左沢向山銀山図」（元禄7年（1694）　絵図1より）

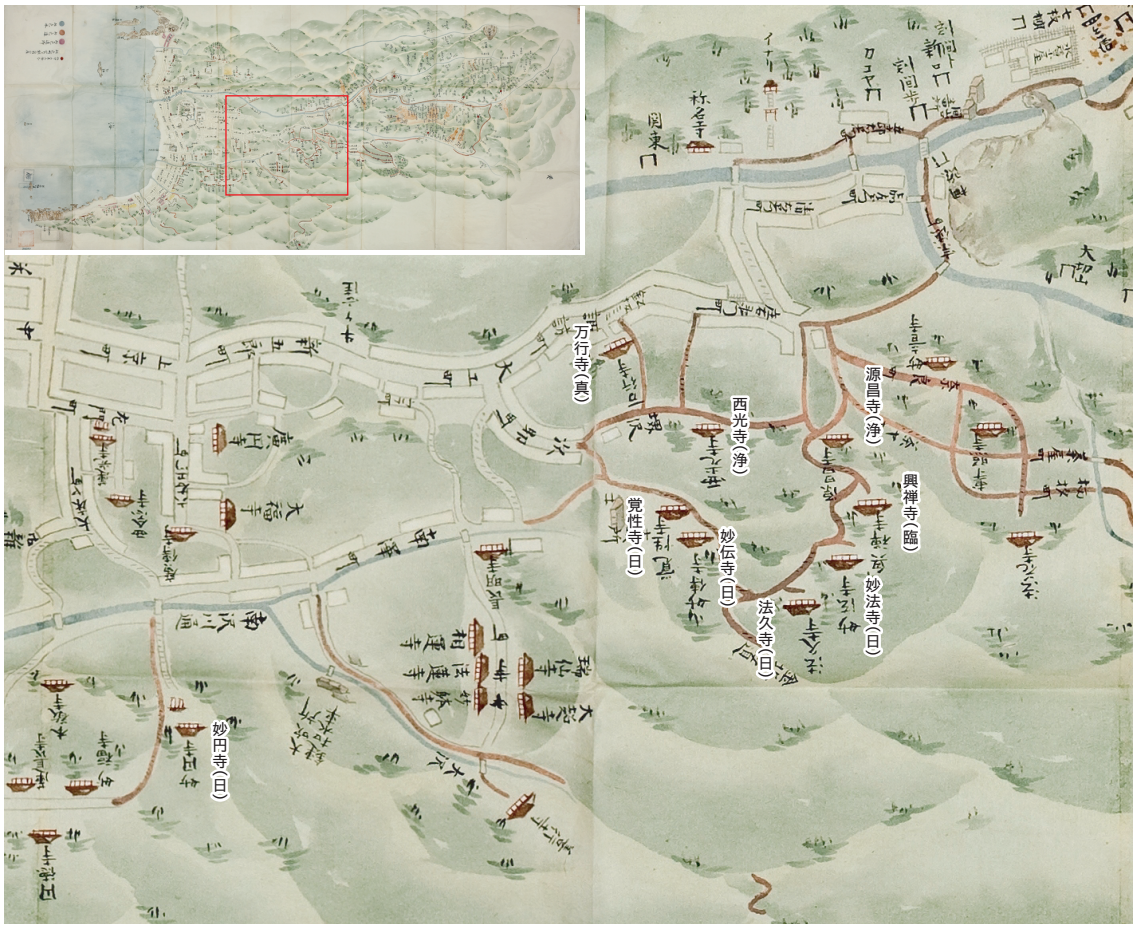
第 2-4-3 図　「佐州相川之図」（元禄 8 年（1695）　絵図 2 より）

第 2-4-4 図　「相川町図」（元禄 9 年（1696）以降　絵図 3 より）

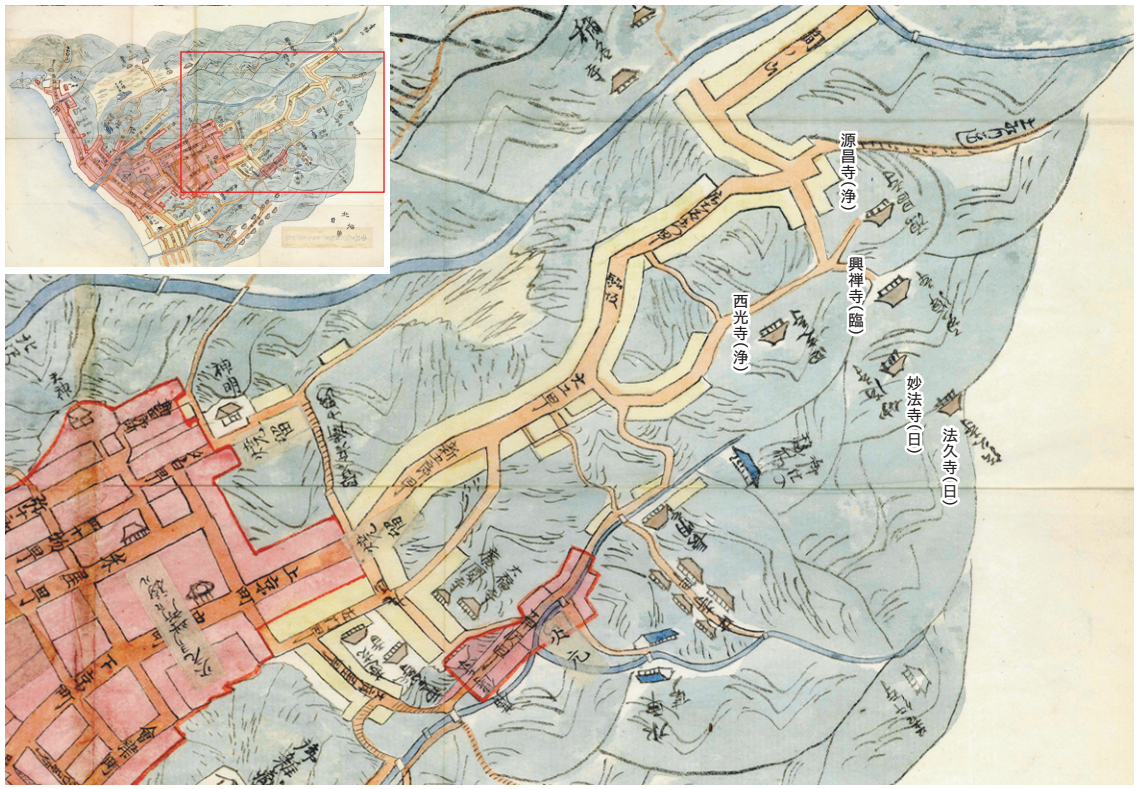


第 2-4-5 図　「銀山岡絵図」（延享 4 年（1747）　絵図 4 より）

第 2-4-6 図　「相川町絵図」（延享 5 年（1748）～宝暦 7 年（1757）　絵図 5 より）



第 2-4-7 図　「相川町々并銀山岡絵図」（文政 6 年（1823）～天保 9 年（1838）　絵図 6 より）



第 2-4-8 図　「安政度相川御陣屋并市中焼失場絵図」（安政 5 年（1858）頃　絵図 7 より）

昭和 17 年（1942）に、上相川奈良町の専照寺を合併して万照寺となる。現存する山門は、佐渡奉行所の裏門を移築したものと伝わる［相川町史編纂委員会 1986］。

② 浄願寺（浄土真宗：次助町）

次助町にあったとされる寺院で、開基年は不明であるが、元禄年中（1688 ～ 1704）に万行寺に合併している（史●）。

主な檀家に、慶安 4 年（1651）の慶安の変の首謀者の一人であった丸橋忠弥に加担したとして佐渡に配流となった、大岡源右衛門・源三郎親子がいる。大岡は槍の名手として名を馳せ、諏訪町の道場には多くの門弟が通っていたという（史●）。大岡親子の墓は、合併した万照寺に今も残っており、浄願寺の境内も万照寺の付近に所在していたものと想定される［斎藤ほか 2003］。

③ 覚性寺（日蓮宗：次助町）

佐渡市阿仏坊の妙宣寺末寺で、寛永 7 年（1630）に上相川上山ノ神町に開基、元禄年間（1688 ～ 1704）に次助町へ移転した（史●）。明治元年（1868）に朽壊して廃寺となる［相川町役場 1927］。

境内地は 1 畝 12 ～ 13 歩（≒ 138.6m^2 ～ 141.9m^2）（史●・●・●）。史料によっては次助町とも上寺町とも表記されるが、文政 9 年（1826）の「相川町町墨引」には、治（次）助町の一部として描かれている（第●図）。

寺地は次助町から金北山方面へ向かう旧道沿いの斜面に立地し、江戸中期以降、坑内の湧水を処理するために江戸から送られた水替無宿たちの菩提寺としての性格が強くなった。安永 10 年（1781）の本堂入仏供養・祖師五百遠忌法事の際には、檀徒であった水替一同が、期間中毎日 2 ～ 30 人参詣し、花飾りなどを寄進して大変な賑わいを見せたことが記録に残る（史●）。その一方で、文化 7 年（1810）と文政 4 年（1821）には、米価高騰を理由に水替たちの飯米が減らされたことが原因で奉行所への駆込訴願が起こり、覚性寺へ水替が逃げ込むといった騒動も起きている（史●·●）現在も、3 基の水替無宿の供養塔が残っている［佐藤ほか 2004］。

④ 妙円寺（日蓮宗：南沢町字赤土沢、元次助町字稗畑）

佐渡市市野沢妙照寺の末寺で、現在は下寺町の北東端、南沢町の南側斜面に位置している。当初は慶長元年（1596）、鶴子四十物町に開基したが、鶴子銀山の衰退により相川の次助町に移転、その後享保 2 年（1717）に現在地に移った。次助町の跡地は、同宗派の妙伝寺に譲ったという（史●・●・●）。

⑤ 妙伝寺（日蓮宗：次助町字稗畑）

元々は能登妙成寺の末寺で、慶長 9 年（1604）、摂津から渡海した日清が上相川岩崎町に法華堂を建立したことに始まる。寛永 6 年（1629）に佐渡市新穂大野の根本寺の末寺となり、寺号を妙伝寺と改め、上寺町の日蓮宗妙法寺の上の台地にいったんは移転したが、その後大工町北側の下大坂町に移る。享保 2 年（1717）、次助町にあった日蓮宗妙円寺が南沢へ移転したことから、その跡地に移った（史●・●）。明治元年（1868）に廃寺となり［相川町役場 1927］、同 26 年に福島県磐城（現伊達市）に移転したが、現在は無住となっている［梁川町史編纂委員会 1994］。

境内地は 2 反 8 畝～ 3 反 2 畝 8 歩（≒ 2,772m^2 ～ 3194.4m^2）。史料上の所在地としては上寺町と次助町が併記されるが（史●・●・●）、文政 9 年（1826）の「相川町町墨引」治（次）助町の項に、覚性寺の前面を走る欄外へ続く道の注記に「法華宗妙伝寺　同宗法久寺　同宗妙法寺　右三ヶ寺道」という記載が見られることから（第●図）、文政 9 年の時点では妙伝寺を含む日蓮宗 3 ヵ寺は次助町の範囲外という認識があったものと想定される。平成 12 ～ 13 年（2000 ～ 01）にかけて行われた調査では、次助町から金

北山へ向かう旧道沿いの斜面、覚性寺の南東に所在するとしている［斎藤ほか2003］。

主な檀家に、甲斐国出身で弥十郎町在住の佐渡奉行所地役人浅原氏がいる［相川町史編纂委員会1995］。

⑥ 法久寺（日蓮宗：上寺町字境沢）

当初は京都妙覚寺の末寺で法円寺と称し、元和８年（1622）、上相川岩崎町に開基した。その後、法休寺と改名し、寛永６年（1629）に上寺町境沢に移り、寛文 11 年（1671）（寛文９年とも）に佐渡市新穂大野の根本寺末寺となった際に法久寺となる。境内地は１反歩（≒ 990m^2）（史●・●・●）。

明治初期の廃興を経て、昭和 17 年（1942）に下寺町妙輪寺に合併され、妙輪寺は法輪寺となり現在も残る。庄右衛門町の南東、上相川と庄右衛門町の境を流れる桐ノ木沢左岸の斜面に位置し［斎藤ほか2003］、出羽出身で慶長年間（1596 ～ 1615）に佐渡に小判師として来島し、後に廻船業で財をなした佐藤氏（相川三町目松栄氏の祖先）の墓や［相川町史編纂委員会 1973］、享保８年（1723）の相川最古の心中の墓、法久寺の題目塔などの石造物が残る［佐藤ほか2004］。

佐藤氏以外の檀家としては、地役人の河野氏（甲斐出身）、佐々木氏（石見出身）、岩崎氏（土佐出身）などがあげられる［相川町史編纂委員会 1973・1995］。

⑦ 妙法寺（日蓮宗：次助町字樋道）

佐渡市阿仏坊の妙宣寺末寺で、寛永元年（1624）、次助町樋道に開基。境内は２反６畝 20 歩を測る（≒ 2,640m^2）（史●・●）。大正 14 年（1925）に廃寺となり、山形県小国町へ移転した［斎藤ほか2003］。小国町移転の経緯については、『小国の信仰』に詳しい。当時、新潟県白根町（現白根市）恵光寺の巓承上人が、長年にわたる日蓮宗寺院の勧請を熱望する小国の信者と、金山の衰勢により寺の維持が困難であった相川の妙法寺を仲介し、双方の思惑が一致したことにより、翌 15 年の堂宇創建に至ったとのことである［小国町 1994］。

庄右衛門町の南東、桐ノ木沢左岸の斜面に位置し、法久寺の西に隣接する［斎藤ほか2003］。主な檀家に、地役人の伊沢氏（甲斐出身）や内田氏（甲斐または伊豆出身）がおり、このうち内田氏については、天明元年（1781）に御蔵定役であった郡右衛門が死去した際に、妙法寺に葬られたという記録が残る（史●）。

⑧ 興禅寺（臨済宗：上寺町桐ノ木沢）

京都東福寺の末寺で、慶長 16 年（1611）（慶長 19 年とも）、信州の海雲慶舌による開基と伝わる。正保３年（1646）に退転した慈徳寺の境内地を、元禄７（1794）年に１反３畝 26 歩の畑地として支配した。

境内地は３反８畝 10 歩（≒ 3,795m^2）で、上寺町では最大級の広さを誇り、田畑を数多く所有していたが（史●･●）、次第に檀家が減少して管理が行き届かないようになると、その土地は奸徒に騙し取られ、昭和２年（1927）当時で５畝５歩（≒ 511.5m^2）にまで減少し、寺基も廃頽しつつあったという（史●）。桐ノ木沢左岸の斜面、法久寺の北隣に位置し［斎藤ほか2003］、現在も登記上は臨済宗寺院となっているが、わずかに寺跡と墓地が残るのみで、事実上廃寺状態となっている。

主な檀家に、地役人の本間氏（紀伊出身）、赤江橋氏（越後出身）、西村氏（摂津出身）、矢渡氏（甲斐出身）、太田氏（信濃出身）があげられ、このうち西村氏は材方役徳衛門が寛保２年（1742）に、太田氏は普請所定役九左衛門が寛延２年（1749）に興禅寺に葬られたことが記録に残る（史●・●）。

⑨ 慈徳寺（臨済宗：上寺町境沢）

京都東福寺の末寺で、上寺町境沢にあったとされる寺院。開基年は不明で、所在地も特定されていないが、正保３年（1646）に廃寺となり、その寺地は興禅寺が支配した（史●・●）［斎藤ほか2003］。

⑩ 源昌寺（浄土宗：庄右衛門町桐ノ木沢）

京都知恩院の末寺で、上寺町地区で最も古い慶長 12 年（1607）の開基である。古くは法輪寺も称しており、境内地は 4 畝 23 歩（≒ 471.9m^2）であった（史●･●･●）。明治元年（1868）に廃寺となった後、いったんは復興を遂げるも、いつしか廃寺となり、昭和 2 年（1927）時点で堂宇は存在していない［相川町役場 1927］。

桐ノ木沢左岸の川沿いに立地し［斎藤ほか 2003］、史料により庄右衛門町・次助町・上寺町と表記がまちまちであり（史●・●・●）、文政 9 年（1826）の「相川町町墨引」の庄右衛門町・治（次）助町のいずれにも源昌寺は描かれていないことから（第●・●図）、各町のちょうど境目のあたりに所在していたものと想定される。

⑪ 西光寺（浄土宗：次助町）

京都知恩院末寺で、元和元年（1615）の開基で、境内地は 3 反 9 畝 8 歩～ 18 歩（≒ 3887.4 ～ 3920.4m^2）。同寺の天神像は、沢根村地頭本間摂津守が京都東福寺より勧請したもので、天正年間（1573 ～ 92）に本間氏が越後上杉氏とともに米沢に移った際に佐渡に残したと伝わる（史●・●・●）。慶応 3 年（1867）に焼失し、源昌寺に合併される［相川町役場 1927］。

庄右衛門町の南東斜面に位置しており［斎藤ほか 2003］、文政 9 年（1826）の「相川町町墨引」治助町には当寺は描かれておらず、東側欄外へ向う道の注記に「浄土宗西光道」とあることから（第●図）、当時は次助町域外と認識されていたことがわかる。

⑪ 教福寺（宗旨不明：諏訪町）

諏訪町に所在したと伝わる寺院であるが（史●）、宗旨及び存続期間とも不明であり、所在地も特定されていない。